少女の時　ふるえる時間

舞夜じょんぬ

その一 だって、わかるわけないじゃない！

その一 だって、わかるわけないじゃない！

　白、だいだい、クリーム色。今日のおかずはみかんとりんごのヨーグルトあえ。さっそく私は給食バケツをかかえて盛り付けに回った。カレーもおかずのうちだけど、今日は最初からこちらをやろうと決めていた。だって、カレーって熱いし、服についたら取れにくい。
「おい美里、俺のは大盛りにしろよ」
　びんの牛乳三十五本セットをひとりで運び終わった貴史が、席に戻るやいなや、息をつかせてささやいた。
「だめ、足りなくなっちゃうもん」
「いんけんな性格してるっけ」
「悪かったわね」
　情け容赦なく跳ね返した。それでも貴史の受け皿には一切れか二切れりんごを多く入れてやった。隣の席だもの、ちょっぴり情けをかけてあげる。
　貴史はふくれっつらのままだった。気付いていないのかもしれない。
　小さい時から鈍いのよね、貴史って。
　私は一言「ばあか」とつぶやいた。
「つば入るだろ、しゃべるなよ」
「きたなくて悪かったわね」
五年四組の教室はカレーのにおいでいっぱいだった。ほとんど配り終えたのだろう。カレーをよそう係は代山さんに押し付けた。廊下に背を向けてそおっとカップに注ぎ、熱くならないうちに、運び係のお盆に置く。一枚のお盆で五人分運ぶことができる。
あと一回運べば終わりという時だった。
「あれ、代山が給食盛っているぜ」
間延びした声が教室に響いた。また廊下から響いた。
「あいつの盛ったカレー、しょんべん臭いだろな」
「くそくせえんだよ。色からしてそうだろ」
「まったく、しょんべんたれてるんだもんな」
　三組の男子四人が廊下にたむろっていた。声の主。一人ずつ代山さんの背中に近づき、片手で鼻をつまみ片手で波を作って逃げていった。ハエの真似かもしれない。
代山さんは知らない振りをして最後によそったカレーを、大盛りにしてお盆の上に置いた。後ろを見ずにかっぽう着を脱いだ。
「代山さん、あいつらなんなの？」
　私は、ふらふらしているやつらを目で追い尋ねた。
「……わからない」
「やな奴よね。怒鳴り返せばいいのに」

　あの中に、去年同じ組だった奴が二人いた。私だったら口だけではなく手も使ってやりかえすだろう。
「じゃあ、いただきますするぞ。清坂、代山、早く席に着け」
　沢口先生がもう両手合わせて待っている。
「では、いただきます」
　みんなの合唱いただきます、と同時だった。
「しょんべんたれ！ しょんべんたれ！」
　二回、早口に叫び、全速力で声の主どもは姿を消した。

　私は、牛乳一気飲みに挑戦している貴史をつついた。
「木村と橋本でしょ。なんで代山さんにちょっかい出すんだろ」
「知るかよ、そったらこと」
「好きなのかもね」
　私はヨーグルト和え皿のパインをほおばった。頬に垂れた髪が邪魔くさかった。おかっぱというよりも長めの髪を前の方だけ三つ編みにしたせいかもしれない。うつむくと毛先にヨーグルトがついてしまう。二重まぶたの大きな瞳に、にきびひとつない丸顔。同級生に自慢できる肌だった。トレーナーはお気に入りのペパーミントグリーン。短めのキュロットスカートもお気に入りの丈だ。誰も誉めてくれないけれども、私なりにおしゃれしているつもりだった。
　突然、横に頭がのめった。貴史が隣でお下げ髪をひっぱった。
「これ、すげえおもしれえ」
　私は振り払った。思いっきり貴史の足を踏みつけた。
「あんた少しおかしいんじゃない？」
「遊べる髪の毛にしてく美里がわるいんだろ。こう、ぶうらぶうらしていると」
またつかんだ。
「むしょうにひっぱってみたくなるんだよな」
　私は貴史のいすを蹴り倒した。貴史が滑り落ちて尻もちつく様を見て、
「ざまあみろ、ってとこね」
と、笑ってやった。

　昼休みは二十分間。
　私は手つなぎ鬼をするため、グラウンドに出ようとしていた。
なのに、廊下で足止めくらって五分もつぶれてしまった。
　あきもせず、あの連中だ。
「代山のしょんべんたれ！おむつしてきたんだろ！」
　こんな調子ではやし立てた。ひとりは親指と人差し指を立てた。
　要注意人物を表す、「バリア」と呼ばれるサインだ。「さわるべからず」
　あと、十五分しかないのに。

　私はだんだんむかむかしてきた。
　あんたたちは代山さんをからかっておもしろいかもしれないけど、私たちはグラウンドで鬼ごっこしたいんだからね。
「いいかげんにしてやね」
　ついに私は怒鳴った。
　だが、男子連中は顔色ひとつ変えない。ただ、
「清坂には関係ないだろ」
　サッカー少年団所属の木村が、人を見下したようなまなざしで言い捨てた。背は仲間うちで一番高い。顔をはすに向けて流し目を使っている。ばかにしていることは見え見えだった。　でも、そういうところがクールだと言って熱を上げる女子もいることを、私は知っていた。
「ならじゃましないでやね」
「だって、こいつくせえもん」
　木村は代山さんを指して言った。
「それはあんたの鼻がおかしいだけじゃないの」
匂いなんてするわけない。
　私はまわりの匂いをかぐ振りをして合間に陽子を見た。
　代山さんは身長が百五十センチと、女子の中では高いタイプだった。木村にはさすがにかなわないけれど。腰まであるストレートヘアーをポニーテールにしていた。デニムのベストは胸がぱんぱんだった。下がつぼまったスカートをはいている。タイトスカートだと言っていた。
　小柄な私に比べると、腰も腕も肉付きがぜんぜん違った。スカートのおなか周りも腰までぴっちりと張っていた。
　私はあまり代山さんと話したことがない。一緒に行動するグループが違ったせいかもしれない。なんとなく色あいが違っていた。「ちょっと、子供っぽい」といいたげな顔で男子の話ばかりしている。妙にねとねとした話で盛り上がっている。私には縁のない世界だった。
　でも、そんなことはどうでもよかった。
　今、私のしたいことは手つなぎ鬼だった。
　言葉を倍速で発砲した。
「それに、なんでくさいのさ。おならしているわけじゃないし、おしっこくさくもないっしょやね。あんたこそ病院行ったほうがいいんじゃないの。鼻の調子が悪いって」
「こいつほんとうに臭い奴なんだぞ。しょんべんたれなんだもん」
「しょんべんたれって、誰よ」
「ほんとに、なあ、代山、しょんべんたれだもんな」
いやに、「しょんべんたれ」に力がこもる。同じ悪口しか投げつけられない木村たちの言葉レベルに、私は勝つ自信があった。揚げ足とりは私のお家芸だった。
「第一ね、木村って、代山さんがおしっこするとこみたわけなの？」
いきなり露骨に切り出されてあせったらしい。ぎょっとした顔で木村は目をひんむいた。
してやったり。

「もしそうなら、あんたってすけべだね。のぞきしてるんだもん。あんたの好きな人に言ってやるもんね、私、知ってるんだからね」
せえのっ！みなさあん！
　私は廊下で絶叫した。
　良く通る声で、
「五年三組の木村くんは、なんと、のぞき魔だっ……」
　言い終わらぬうちに木村は私の腕をねじ上げた。本気ではなかった。でもちょっとばかり痛い。私はひざで急所を狙った。ねらいどおり木村はしゃがみこんだ。顔を引きつらせて、
「見るわけないだろ！こんな女の」
吐き捨てた。
「じゃあ、しょんべんたれっていうのを取り消しなさいよ。そしてさ、代山さんにあやまんなさいよ」
　絶対勝つ自信がある。
　どんな理由があるにせよ、女子に向かって「しょんべんたれ」と連呼するとは、侮辱するにもほどがある。
　変な誤解を受けてしまうじゃないか。代山さんがおもらししたと思われるじゃない。
「ちょいと待て、清坂」
口を大きく開きかけたまま、美里は振り向いた。
「ほんとうにこいつ、しょんべんたれたんだぜ」
「それっていつよ。そんな昔のこと言ってどうするの」
幼稚園か小学校一年くらいのことだろう、そう美里は思っていた。小さい時の失敗までひっぱりだすなんて、なんとねちねちした奴だろう。決して木村は嫌な奴ではないと、思っていた。でもこういう性格だったとは思わなかった。好みじゃない。
「代山さんがおもらししたとこ、見た人いるの」
「いるぜ、山ほど」
　そういう噂を耳にしたことはなかった。たぶんクラスの違った一、二年あたりのことではないだろうか。教室でかもしれない。ならば見た人もたくさんいるだろう。でも、それはもう時効だろう。私の中ではそうだった。
「あんたの目で見たの」
「俺は、その瞬間を見たもんな」
　きっと、隣の席にでもいたのだろう。
「あんたの記憶力ってすごいのねえ。そんなすけべなことしか覚えられないわけ」
　私の方がここまでは優勢だった。すでに十分経過。教室に残っていた男子もぞろぞろと囲んでいる。はるかかなたより野次馬部隊一組も揃っていた。私たちをぐるりと囲っていた。
「本当だとしてもね。たかが赤ちゃんの頃の話でしょ。今たれたっていうならわかるけどね」
　息もつかずに怒鳴りつけた。
　ここまでいえば、負けを認めるに決まっている。

とたん、まわりの空気が急にゆるんだ。
なにか、変なこと、やっちゃったっけ？
四組の女子達も、まなざしに責めの色が混じり始めていた。代山さんはその女子たちに守られるように隠れ、うつむいていた。ひそひそ声。それを背に木村は復活した。
「なあ、清坂」
私の苗字を呼び、にやけた。
「こいつがもらしてねえって証拠、あるのかよ」
証拠は、ない。
でも本人がいる。
振り返って代山さんを探した。隠そうとしても隠れられない様子で、もじもじしていた。
はっきりと「変なこと言わないで」と言い返せば、私だってこんなことに巻き込まれないでうすんだのに。
投げやりに答えた。
「それは代山さんに聞けばいいっしょ」
木村はまだ手を緩めなかった。どこかおかしかった。計算違いしているようだった。
自分の中に余裕がだんだんなくなっていった。
「昨日のことだぜ。知らないわけないだろ」
思わぬ言葉だった。『昨日』に私はふらついた。ここで負けてはならない、と言い聞かせた。
きのう、代山さんは普通だったよね。
「ずっと代山さんと一緒だったけど、ぜんぜんそんなことなかったよ。同じ組の私が言っているんだから間違いないもの」
いや、そういえば……。
思い当たるふしが、ある。
でも陽子が……するなんて、ありえない。
「抜けてるのはおめえだよ。教えてやるから黙って聞いてな」
木村を代表とする三組男子は、廊下にとどろく大音声を上げた。さっきやった私の真似だった。たぶん、どら声の大合唱は、同じ並びにある六年の教室にも聞こえただろう。
「みいなさん、昨日の立会演説会で、五年四組の代山さんは、おっきなおもらしをしました。そんときのしょんべんはとってもおっきくてすごかったので、始末するのがたいへんでした。これはノンフィクションです！」
思っていたとおりだった。

――立会演説会。
やっぱりそこが盲点だったのか。
そっと同級生たちの顔をうかがった。答えは一目瞭然だった。目をそらせるのは代山さんグループの子。私の仲良したちは意味もなく言葉をつぶやいていた。みさと、みさと、どっかいこ

うよ、と。信じられないのは私だけだった。
　ひそひそ声と「本当かよ」とささやく男子たち。
　私もいっしょに心でささやいていた。
　つい、口からこぼれた。
「ほんとに、代山さん、あすこで、したの？」
　誰に話し掛けるでもなく、つぶやいた。代山さんにははっきりと聞こえたらしい。
　うん、と答えるかわりに、代山さんは背を丸めて顔をおおってしゃくりあげた。鬼ごっこするはずだった女子たちは、私から離れたところへ代山さんを座らせ、なぐさめの声をかけていた。
　――要するに。
　代山さんはあんな大きな身体をしているのに、おしっこをもらしてしまったということ。

　鐘が鳴り、後味の悪さをかみ締め、私は教室に入った。
　女子のきついまなざしと、
「清坂さんってば、黙っていればいいのにね。代山さんかわいそう」
を、背に受けて。

その二 なるほど、こういうわけだったのね

　あやまるにはあやまった。でも代山さんは泣きふすばかり。取り巻きの子には、
「今ごろ清坂さんがあやまったって、陽子の心の傷はいえないんだからね」
と、追っ払われた。
　私の仲良したちも、気を遣ってか当り障りのない話しかしてくれなかった。知りたいのはやまやま。でも私も深く聞き込めるほど神経はずぶとくないつもりだった。
　なぜ、誰も話してくれなかったのだろう？
　そりゃ、みんなに言いふらす必要はないけど。
　でも、同級生の大失敗を知らずにいたなんて。今まで一度もなかった。
　他の組で起こったことだったらとにかく自分の組ならば、五分もしないうちに噂のウイルスが伝染するはずだ。
　四組の男子達も、代山さんのこしらえた水たまりを見ているはずだ。
　なのに、誰も、一言も口にしていなかった。
　それが私には信じられなかった。

　いろいろ考えていくと、自分でもわけがわからなくなってきた。
　家に帰ってランドセルを背負ったまま玄関に座り込んでいた。
　電話が鳴った。母が出て、
「美里、たあちゃんから電話よ」
と、声をかけた。貴史からだった。

「美里、おめえ知らなかったんだろ。知るわけねえよな」
「知らないって、何」
「あん時、美里は選挙委員でどっか行ってたっけさ」
　はっと思い出した。
「あの、立会演説会の時、うん。私、いなかったよ。あの時に、起こったの？」

　児童会役員選挙の際、投票の前に立会演説会と呼ばれる、立候補者の抱負売り込みタイムが用意されていた。私は選挙のはじまる二週間前からポスター作り、ビラ作り、投票用紙作りに駆り出されて大わらわだった。
　昨日も木曜五時間目に行われる立会演説会のため、給食を食べてすぐ、会場の体育館に駆けつけた。
　ろくすっぽ演説なんて聞いていなかった。別の教室で投票場所の準備をしていた。箱を用意したり、投票監視員用のいすを用意したり、こまごました仕事はたくさんあった。終わるとすぐに

開票作業が行われた。結局学校を出たのは五時過ぎだった。

　貴史がいうには、
「その間に、事件が起こったってこと」
　会計、書記、副会長、最後に会長のそれぞれ候補者が演説してゆく。さて次は副会長の番、と回ってきた時だった。
　貴史の説明をおおざっぱにまとめるとこういうことだった。

　貴史の斜め前に代山さんは座っていた。その日の代山さんは真っ赤なジャージ上下姿で、教室から運んできた椅子に腰を下ろしていた。
　児童会の選挙権は三年から。被選挙権は四年から。立会演説会の際、三年から六年までの児童は全員体育館に集まり、椅子をすきまなく並べて演説を聞くのがいつものパターンだった。ぎゅうぎゅうづめ。空気もにごる。椅子がなかったら貧血起こして倒れるかもしれない。
「でも俺にとっては椅子があったって関係ねえよ。眠いしつまんねえし、むしゃくしゃしてたなあ」
「あんたのことだから、居眠りしてたんでしょ」
「当たり。そうしたら、なんか雰囲気が、暑苦しい感じになってきてて、いやおうなしに目がさめた、鼻が変、っていえばいいんだろかさ、とにかく変だった。とりあえず会長の演説だけは聞きたかったから、どこまで進んだか聞いて、また寝ようとしたんだ。したら、その時」
、代山の椅子から音がしたんだ」
「音？」
よくわからず私は聞き返した。
「わかるだろ。初めて聞くもんでもないし。しゃあしゃあしゃあって」
　自分にも毎日響いている覚えのある音。気付いて頬がほてった。
「俺も何がおこったかよくわからなかったから、椅子の下をとにかく見てた。したら、やっぱり色が変わってるんだよ。代山のジャージが。色が濃くなっている部分から、床の水たまりへとすんなりつながっているっていうか」
「だいたいわかった」
「こいつ、ちびってるって、そりゃここまできたらわかるぜ。でも、どうすればいいと思う？ 代山はうつむいてぶるぶる震えているし、俺とかが『早くしょんべんに行ってこいよ』なんて言ったら泣かれるのが落ちだろ」
「さすが、貴史は自分の立場をよくわかってる」
「ばあか、だから、俺の前にいた女子をつついてさ、あいつも気付いていたらしいけど、俺と同じでどうしていいかわからなかったんだろな。すぐに代山を連れて出て行った」
　だいたい想像がついた。きっと代山さん、周りの視線に、ジャージ上のすそを深く下げたに違いない。
「気付いてたのは、どのくらい？」

「三組の木村たちとか、五組の女子ぐらいだろ」
　貴史はそこまで話した後、
「でもさあ、やっぱり、まずいだろ。そのままにしとくと。で、榊原が俺の方を見てさ、『なんかこのままにしとくとまずくない？』って声かけてきたんだ」
「あんたはどう答えたのよ」
「まあな。って。そしたら榊原が、『俺、新聞紙借りてくる！』とか言い出して、一気に走り出したんだ。俺もひまだったし、そんな匂うところで寝ていたくなかったから、榊原と一緒に用務員室に走ったというわけ」
　貴史の気持は良くわかる。となりにおしっこの池という状況は、あまり気持いいもんではないだろう。見ているだけで匂いも鼻をつくだろう。私もきっと同じことしただろう。言い訳作って外に出たいに決まってる。
「用務員室で何もらってきたの」
「一日分の朝刊をもらって、ついでにぞうきんもらって、遠回りして戻ってきた。誰も注意する奴のいない廊下を駆け抜けるって、気持いいよな。榊原と思いっきり走ったぜ」

　その後投票も終わり、四組では帰りの会が始まった。
　ざわざわと、代山さんのおもらしが知れ渡っていったという。詳しいことを知っているのは、代山さんの周辺にいた者だけだったはず。でも,退場の時に椅子がひとつ残っていたこと。濡れた新聞紙が投げてあったこと。代山さんが早引したことなどから考えてあっさりばれた。
「そりゃ、信じられないよね。あの代山さんが、さあ」
　私は受話器を握り締めたまま何度もうなづいた。
「でも、沢口が、いきなり『黙れ！』って怒鳴ったんだ。怒鳴ることはないよな」
「相変わらずお説教でしょう。何言ったのよ」
「『みんなも知っていると思うが、代山がトイレに行きそびれて、ちょっとした失敗をした。でもそれは誰にでもあることだ。今日はたまたま演説会だった。他の人がおもしろはんぶんにからかうことがあるかもしれない。だけど、四組のみんなはそんなことをしないでほしい。一番、傷ついているのは代山なんだからな。明日、代山が来た時は、何もおこらなかった顔で迎えてやってくれ』ってさ。最後に」
「最後に？」
「『このことで代山に何か言う奴は、人間としては認めないぞ。人間失格だ』だと。確かに人間失格にはなりたくないもんな」
　私はその場にいなかった。秘密を知る権利はなかった。だから今まで何も聞かなかった。
人間失格になりたくない貴史も、教えてくれなかった。
　給食時間まで守られた約束だったのだろう。木村たちの一声がなければ。

　でも、私にはするりと入ってこなかった。
　確かに代山さんは学校に来づらくなっただろう。低学年の頃だったらはやしたてられただろ

うし、五年生ともなったら陰で物笑いの種になるだろう。
　実際、木村たちはいい標的ができたとばかりに、陽子をせせらわらったもの。
　沢口先生に言わせれば、木村たちは人間失格の最たるものだろう。
　私も奴らの、悪口を言う態度についてはそう思った。
　ただ、ひっかかるのは、沢口先生の言った
「なかったことにしろ」
というせりふだった。
　そんなことできるのだろうか。
　代山さんが昨日、体育館でおもらししてしまったのは正真正銘の事実だ。
　知らないふりだなんて、嘘をつけってことと一緒だ。
　もちろん、代山さんに「あんたおもらししたんだって？」と非常識なことを聞く気はない。触れるべきではないだろう。忘れちゃえばいいだけのことだ。
　でも、木村たちのようにつっかかって来た場合、知っている友達連中はどういう風に立ち向かったのだろうか。
　私は木村の言い分を頭から嘘っぱちと決めてかかった。だからああいう言葉しか出せなかった。
　でも他の子は？
　代山さんの友だちは、私がしたようにかばおうとしなかったじゃないか。
　美里がひとり立ち回っているのを、黙ってあきれて見ていただけだ。
　終わったら、
「清坂さんって、よくあんなこと言えるわね」
とくる。
　ああいう代わりにどういえばよかったんだろう。

　貴史の声は受話器から響いてきた。慰めらしくなかった。ちょっと突き放したような言葉だった。
「あのさ、美里。沢口は確かに代山をかばえって言った。けどな、なかったことにしてくれっていうのは無理なような気がする。今日のことっていったって、もう起こってしまったことを消すことなんてできねえもの」
「私、代山さんがちびったってこと知ってたら、あんなこと、絶対言わなかった」
　私は、うん、うん、とうなづいた。
「ああ、でもなあ、私、明日学校に行きたくないなあ」
「来たくないならくるなよ。でもな、明日になれば、みんな忘れてると思う。美里にかまってる暇なんてねえよ」
　胸につかえた氷がひとしずく溶けて流れた。
　私は、そう期待することにした。

貴史はわかってくれているのかもしれない。

幼稚園の頃からずっと一緒だった。幼馴染というにはまだ私も貴史も、まだ子どもすぎた。同性の友達には太刀打ちできないようなやさしさが、互いの中にあった。

人間失格になること覚悟で、貴史は教えてくれた。

私は貴史の言葉を細切れに、身体の中へ行き渡らせた。

何度も何度も、かみ締め、飲み干した。

その三　よくそんなこと今ごろいえるわね

　次の朝、算数の宿題答えを詩子ちゃんから写させてもらった。
　最初からさぼるつもりではなかった。夜中までシャープペンシルを握り締め、面積を求める文章題を解こうとしたのだ。なのに、教科書の図、長方形が目に入ったとたん思い出したくないものを思い出してしまった。立会演説会、水たまり、次々と手繰り寄せられてしまった。
　『この湖の面積を求めよ』
　『この部屋の面積を求めよ』
　『この紙の面積を求めよ』
　頭の中で勝手に解釈してしまう。
　水っぽくふにゃふにゃしてきたまぶたに、貴史から聞いた立会演説会の様子が浮かび上がってきた。
　四角い体育館、四角い投票用紙、円く広がった湖。その真中に孤島状態で代山さんが座っている。
　さあこの面積を求めよ。
　体育館の面積を。
　投票用紙を。
　代山さんの水たまりを。
　泣きそうな顔をして、でも声は出せずに……あれから答えを導き出す気力はなくなり、私は息苦しい眠りについた。

　思ったとおり、貴史の楽観的想像は外れていた。教室に入るなり、代山さんの面倒をみていた女子たちは、露骨に敵意をあらわして、私を迎えた。
　寝ぼけ眼のまま挨拶をしたけれど、一切無視。
　わざわざ私の座っている机のそばにひとりずつやってきて、
「これから、清坂さんとは絶交するから」
　計十二人。代山さんは入っていなかった。言い捨てていった。
　無視してノートを写していると、教室の後ろ側に固まったあいさつ回りの女子たちが、聞こえごかしに責めたてる声が聞こえた。
「いっつも清坂さんってそうよね。黙っていれば、みんな忘れているのに、なんで騒ぎを広げたがるの」
　こういう場合は、黙っているが勝ち。おなかの中でコンクリートがぴしぴしとかたまっていきそうだった。怒りを代山さんは必死にこらえた。
　いくら「知らなかった」と言い訳しても信じてもらえなかった。
「よくしゃあしゃあと言えるわね。知らないわけじゃないくせに。おもしろがってたんでしょ。

陽子がひどい目に合うのを」
　暗黙の了解として、『女子同士の秘密は共有するべきもの』という意識があるのも確かだった。
　ああいうことは自然に伝わるはず、そう決めつけられてしまった。

　確かにそうだ。四組内で起こった出来事は、大抵すぐばれるものだった。
　もちろん、絶対に話してはならない人には言わないが、ちょっと仲のよい友達だったら「あのね、誰にも言わないでね」とつい口が緩んでしまう。
　沢口先生の『人間失格』発言は、四組の女子たちの口をきっちりチャックで閉めてしまったらしい。
　私と仲のいい友達も、さらに言うならば貴史ですらも。
　机にうつぶして目が潤みそうになった。息を止めて涙をこらえた。こうすると目を開けているのがちょっと辛いだけで、しずくは垂れてこない。
　私もあの人たちを無視すればいいや。

「ちょっと、それはひどいんじゃない。美里はかばってあげたのよ。逆恨みするなんて、あんたたち馬鹿みたい」
　詩子ちゃんがつかつかと悪口を言う女子達に談判しているらしい。その声が聞こえた。ひくっと、背筋を伸ばした。
　私と同じくらい鼻っ柱が強い、とは貴史と木村がよく言っていたことだった。
　もし昨日の昼休み、私と一緒にいたならば、絶対に援護射撃をしてくれただろう。
　あらためて私の机で立ったまま、詩子ちゃんは私にささやいた。
「美里、泣かないでよ。美里はちっとも悪くないんだからさ」
「私、泣いてないよ」
　私の机にかがみこみ、目を合わせないで励ましてくれた。詩子ちゃんの髪は長い。代山さんと同じくらい腰まであるだろう。束ねないで伸ばしたままにしているせいか、しょっちゅう中学生か高校生に間違えられるという。よく木村が「あの女、色っぽいよな」と噂していたらしい。貴史から聞いたことがある。
「土曜日でしょ。うちに帰って、急いでご飯食べて、みんなでデパート行こうよ。今度、新しいアイスクリーム屋さんが入ったんだって。『イタリアから本場の味到着！』って、昨日の夕刊に載ってたよ」
　本当は小学生だけでデパートに出かけてはいけない決まりになっていた。でも守っている奴なんて、私の周りには誰一人いない。建前の決まりなんて無視していた。
　私を元気づけようとする詩子ちゃんの気持が、アイスクリームよりも甘く、胸にすっと溶けた。
「うん、食べに行ってみたかったんだ」
「じゃ、恵理子たちにも声かけてみるね」

　返事を確認するやいなや、詩子ちゃんは前の席にいる、私と仲のいい友だち三人に誘いをかけ始めた。それぞれが、私の方を振り向いて、頷いてくれた。
　いつもと変わらない今日が始まりそうだった。
　やはり、貴史の予言、当たってた。
　ちらりと隣の席にいる貴史の方を見た。まだ席についていない。おかしい、どこいったんだろう、ともう一度入り口を見たら、違う方向からお下げ髪をひっぱる手が出てきた。
　思わずはらいのけ、私は叫んだ。
「何やってるのよ貴史、人の髪の毛引っ張って何が楽しいっていうの、ばっかみたい」

その四　なんだか、こわい

その四　なんだか、こわい

　帰りの会のあと、私は沢口先生に呼びつけられた。
「清坂、終わったらすぐに職員室に来い」
　大体、理由はわかっていた。
　昨日の大立ち回りだ。代山さんを囲む女子のひとりが、誤解曲解溢れる内容を言いつけたらしかった。
　くすくす笑う声が聞こえた。人が叱られるのを見るのが楽しいらしい。
　詩子ちゃんたちには
「かならず行くからね！」
と約束し、大急ぎで職員室に向かった。

　どうも沢口先生は、私が代山さんのおもらしをネタにして、三組の男子連中と一芝居打ったと思い込んでいる様子だった。奥の三組担任席では、木村たちも説教を食らっているのが見えた。情けないことに、目をこすっていた。
「どんなにはずかしかったか、考えてみたことはないのか？」
「私、そんなこと知りませんでした」
「代山の気持を察すればこそ、五年四組の仲間としてかばってあげるのが、本当ではないのか？」
「私はかばったつもりでした」
「そうか。清坂、お前は確かに成績はいい。でも肝心な思いやりという気持が欠けた人間だということを、自覚しなくてなならないな。それさえあれば、少しくらいテストの点が悪くても立派な人間として認められるんだがな。いいか、清坂、先生は、お前を軽蔑するぞ」
　思わず言いかえそうとした。すでに沢口先生の目は私を見ていなかった。そばによられるのも気持ち悪い、むかむかする、そういった表情で私に向かってしっしと手を振った。
　これが、貴史の言う、『人間失格』宣言か。
　じっと奥歯をかみ締めた。喉の奥からこみ上げる塊を、押さえつけた。
「よし、帰れ」
　私は一礼し、職員室から出た。まだ木村たちは残されている。
　言い訳する余地を与えてくれなかった。悔しくて泣きたくなったけれども、木村たちのように涙ぐまずにはすんだ。

　木村たちなんて、自分からちょっかりだしてきたくせに、今ごろ泣いてるんだもんね。
　あの姿を、あいつの好きな子に見られたらなんって思うんだろう。
　そう、詩子ちゃんに見られたら。

ちゃんと貴史から情報はもらってあるんだ。
木村はそれを知っているから美里に逆らわないんだ。弱み握られてるってわかってるんだもん。
それに、一歩間違えたら、人間失格の烙印を押されるのが詩子ちゃんだった可能性だってあるんだから。
詩子ちゃんはあの時、放送委員だったから、休み時間もどってこられなかったんだよ。
ほんとに木村ってば、情けない奴。
それにしても全くよく言うわよ。沢口の奴も。
言いたいことなら山のようにあるわ。

私を悪玉扱いにするけれども、沢口先生、代山さんの友達、いやいや代山さん本人もおかしい。
もちろん代山さんをかばうための『人間失格』宣言には何も言い返すことはできない。でも、少しは私の言い分を聞いてほしかった。
結果から言えば、私は間違った情報のもと、代山さんをかばおうとしただけだ。
もし、代山さんがどういう立場にあるのかを理解できたならば、私は別の言い方で助けようとしただろう。
「ひとがちょっとしくじったくらいでぴいぴい言うなんて、あんたほんとにガキよね」
しかし、沢口先生が理想とするかばい方は、あくまでもそんなことがなかったという顔をして、「やめなさいよ」と言うことらしい。
本当に代山さんがおもらしをしたということだったら、私は嘘が言えなかっただろう。
嘘をいわなくても代山さんの名誉は守れるはず。
はっきり言って、沢口先生はうそつきだ。
そして代山さんの仲間たち。
私を押しのけて木村とどうしてやりあわなかったのだろうか。
私がしゃしゃり出てきたから観客になりきっていたくせに。
最後に代山さんが泣き出すや否や、私に何もかも押しつける。
自分たちが一番味方だったような顔をして。
「清坂さんっていやな人ね」
本当は自分がいい子になっていたいだけだったんじゃないの？

私はそこまで一人、つぶやきながら、少し息をついだ。

もう一人。
これは禁句なのかもしれないけど、思うだけならいいよね。
代山陽子さん。
「トイレに行ってもいいですか」の一言が、どうして言えなかったんだろう。

人、人、人で体育館は埋まっていたし、途中で席を立ったら絶対目立つに決まっている。
でも、その場でおしっこをたれるよりは、恥ずかしくないと思う。
真っ赤になって、びしょびしょの床を見つめてるなんて、私からしたら、あきれてものが言えない。
そういえば、体育の時間、代山さん、見学していたよね。
風邪を引いてるわけじゃないし、どうしたのかなと思っていたら、詩子ちゃんが、
「代山さん、あれなのよ」って教えてくれた。生理なんだって。組で一番早かったんでしょ。私にはぜんぜん想像つかないけれど、話を聞いた時はわけのわからないため息と怖さを一緒に感じた。どんな風になるのか、想像がつかなくて、わからない分、怖かった。その怖いことを、毎月代山さんは平気な顔で受け入れてるんでしょ。なんか、大人よね。だから男子の話に夢中になれるのね。
大人になったはずの代山さんが、まさかトイレにいきそびれて、ちびっちゃうなんて、思ってみなかった。
男子の品定めばっかりしてるくせに。大人ぶってるくせに。やっちゃったことは幼稚園なみよね。

一気に心の中で罵った後、すぐに封印した。
ご飯食べたら楽しいことが待ってるんだから。

約束どおり詩子ちゃんのいるアイスクリーム屋前に駆けつけた。幸い、遅刻はしないですんだ。
一つ二百五十円のりんごアイスを受け取り、五人で階段踊り場の休憩椅子に陣取った。灰皿が置いてあるところを見ると、ここは喫煙コーナーらしい。トイレの前にちょうど席が人数分あった。
喫茶店に入るとお金がなくなるけれど、ここなら何時間いてもただだし怒られない。
詩子ちゃんはペパーミントアイスを半分なめ終わった。私にも一口すすめてくれて、両足を木の棒のようにぴっと伸ばした。
「だいたいね、沢口はあの人たちをひいきしてるのよ。代山さんたちって確かに可愛いし、『色っぽい』もんね。スケベなのよ。美里がもし代山さんの立場だったら、こんなにかばってもらえないわよ。きっと、代山さんのことだから言い訳しないで可愛い顔して泣き喚いたんじゃない。私、別に代山さんのこと、嫌いじゃないけど」
防御線を引いて、その後、落とした。
「ひたすらお高く留まっている人って大嫌い」
何を言いたいかはわかった。詩子ちゃんは『誰がくっついた』『誰が離れた』『誰と誰がどこまでいった』とか、色恋沙汰の話をするのが大嫌いだったのだ。
「ああいう人に限ってさ、『あなたたちって、赤ちゃんね』とかとほざくのよ。何度私、切れそうになったかなあ。だから、代山さんの一件について言いたいことは、『代山さんって、赤ちゃ

んね』の一言で決まるのよ」
「詩子ちゃんって、結構きついね」
　私はそれだけ答えて、食べるのに専念していた。何か口にしたら、また取り返しのつかないことになりそうだった。詩子ちゃんを信じていないわけではないけど。
　調子付いたのか、他の三人がさえずりだした。私は詩子ちゃんを見ないでうつむいた。きっと泣きべそかいているように思われただろう。
「実はさ、私、あの現場、見ちゃったんだ」
「えー？言わなかったじゃない！」
「言えるわけないでしょが。人間失格だもん。でも、美里をこんな目に合わせた以上、私たちにもかたきとる権利あるわよね。それがねえ」
　声を潜めた分、話はえげつなくなってしまう。女子同士の鉄則だった。
「なんか変なのよ。きょろきょろして、足ばたばた言わせて。おっきなおしりぎゅうぎゅう振って。椅子のすきまから丸見えなのよ。だからあたし聞いたの。『具合悪いの』？って。
「よくそんなの聞けたね」
「まさか、おしっこがまんしてるの？？なんて聞けないよ。でも、代山さん、小さい声で『ううん』だって。なら、いいやと思って無視してたけど、すぐにきたわね。腰浮かせたり、ため息ついたり。あまりにもひどいから他の男子も指差して何か言ってるのよ。三組とかが。そして、とうとう」
「とうとう、きたの」
「椅子が、なんか、色変わってきてるじゃあない。ぽたぽたしずくが垂れてるの。で、音がすごかったの。よく冬に水道の蛇口が凍ることあるじゃない？で熱湯かけて溶かすじゃない。その時、氷が落ちてくる音、聞いたことある？一回ぼたっと氷の塊が落ちて、その後、じゃあああって」
「なんだかすごい、リアル」
「生でひとがしているとこ、見たことなかったから、びっくりして、ぼーっとしてたんだ」
「アンモニア、ぷんぷん」
「私の方まで水が流れてきてさ、あせったあせった。私の隣にはたまたま貴史がいたんだけど、私がしたと思ったみたいなのね。軽蔑の目を向けるわけ。冗談じゃないって。だから私、『代山さん、外に出ようね』って声かけて、一緒に体育館を出たの。でもその後は知らないよ。出たとたん、ものすごい格好で代山さん、トイレに駆け込んでしまって、その日はもう見なかったから」
「トイレに……？　なぜ？」
「やっぱり、恥ずかしかったんじゃないの。五年生にもなってさ、おもらしなんてした人、普通いる？　見たことある？　ないよね。行きたくなったら、ちゃんと行くよね」

　話は続いていた。私は全部聞いていた。いつもならば話に入って一緒に代山さんの悪口を言い合うのだろう。一緒にぼろくそこきおろしているときはすっきりする。

　でも、入ることができなかった。
　今ここにいる五人は、仲良しグループだ。グループの一員だし、違う、おそらく好きになれないグループの子に思いっきり恥をかかせてくれた私を、英雄あつかいしてくれている。
　でも、もし、おしっこをもらしてしまったのが私だったとしたら？
　五人はなんと言うだろうか。
　守ってくれるだろうか。
　それとも影でせせら笑って、
「清坂さんって、赤ちゃんね。普通、五年生にもなって、おもらしした人、いる？」
　と陰口をたたくだろうか。
　口で言っていることと心に思うこととは全く異なるのかもしれない。
　私は決して代山さんのようにはなりたくなかった。
　おもらしもしたくない。表向きだけで親友づらもされたくない。ただ、一人でいいから味方がいてほしい。
　今の私には、誰が本当の味方なのか見分けられなかった。
　もしかしたら誰もいないのかもしれない。それを知る時がいつか来るであろうことも、覚悟していた。いつなのか、わからない。私はただ、怖かった。

その五　男子だから、いいのよね

　私の周りでは三年生くらいまで、同じようなことが起こった。
　教室の中で、がほとんどだった。五人くらいいただろうか。
　当時の記憶は鮮やかに残っていて、今でもたまに、仲間うちでささやかれるものだった。
「あの子、音楽の時間におしっこたれたんだよ。みんなで合唱している時に、ビニール袋を足の間に入れて、その中にしようとしたんだよ」
　表だっては言わなかったけど、泣かせる話だと思う。
　貴史に話したら、
「悪あがきだってわかってるけど、その気持ち、すげえわかるな」
　しみじみ、実感を込めてつぶやいていた。
　もらすところまではいかなくとも、もうだめっと言いたくなる時はある。そうしちゃおうかと血迷ってしまいそうになる。でも、どんなに言い出しにくくても、手を挙げてトイレに駆け込むのは、しちゃったら最後、決して時効にならないことだとわかっていたからだ。

「美里、まだめげてるのかよ」
　月曜日、朝の会最中、隣の席の貴史に話し掛けられた。
「ただ、めげてるんじゃないってば」
　一時間目は国語だった。薄い教科書を口元に当てた。日直が『今日の目標・ろう下を走らない』を黒板に書いているところだった。貴史にしか聞こえないよう、小さな声でこっそり聞いた。
「ねえ貴史、あんたおもらししたことあったっけ」
「まさか、ねしょんべんならあるけど」
　それは小さい頃から知っている。
「いつまで続いた？　あんたのおねしょ」
「お前、俺にそんなこと言わせたいのかよ」
　貴史は指で数字の四を書いて見せた。
「四歳？」
「去年まで」
　四年生までひきずってたの？
　もっと声を小さくして聞けばよかった。
　さすがに貴史も目をそらしてきまり悪そうに私の教科書をつついた。私も口をとがらせて黙った。
　しまいに貴史はふくれっつらで答えた。
「……美里、ばかにしてるだろ」
「そんなんじゃないけど。でさ、自分でおふとんとか、片付けるの？」

「あたりまえだろ。親にみつかったらどつかれる。姉ちゃんのドライヤーくすねて乾かしたり、やった」
「そうよね。それが普通よね」
　私はため息をついた。
「自分でしでかしたことは、自分で始末しなくちゃね」
「でも、家ならそれでもいいけどな。親戚の家とかでやっちまったら、どうしようもないだろ。夜中に気付いたときも、冷たいのをがまんして寝て、朝にごめんなさいってあやまりに行き」
「へたに小細工するとまずいのね」
「まあ、黙ってみつけてくれるのを待つほうがいいってこと」
「なんでなんで？」
　ぐんぐん引き込まれていった。私の相槌につられ、貴史は熱を入れてしゃべりつづける。
　少々、他人の目を忘れていたかもしれない。
　もちろん低い声で話しているつもりでいた。でも日直二人の顔が怖かった。たぶん、学級日誌の『うるさい人』記入欄に書かれているだろう。
「慣れているって顔すると、へたしたらそこの家では泊めてくれなくなるんだ。それよりも、初めて来たので緊張しました。ついふとんに地図を書いてしまいました、ってしおらしくしていると、おばさんたちも笑顔のまま、片付けてくれるんだ。あまり作った態度をするのは好きじゃない。でも、まあ、しょうがないって」
　そういうものなんだろうか。きっと、そうなんだろう。
　急に貴史は話の矛先を私に向けた。
「けどな、ちびった場合も同じだぜ」
「なにが同じなのよ」
　自分への風向きに私はどきまきした。
「自分じゃあ、片付けられねえよ。じゃあ、美里。もしこの場所でお前がジャージャーたれたとするぜ。たぶん、一番最初に気付くのは、俺だよな。ここの席は教壇からも良く見えるから、先生もこっちをみる。さてと、お前は言いにいけるか？ちびりました。どうすればいいでしょうかって」
「覚悟があれば、別じゃないの？　がまんできなくなったら、トイレに行きますって言いにいけばいいんだから。それしないで最悪の場合も考えないで、おろおろするなんて、馬鹿みたいじゃない。最悪の場合どうするかも考えておかなくちゃ」
「できるわけねえだろ。それよか、さっきの話に戻るけど、一番まともな方法はな、俺が先生の所に行って、紙かなんかで渡す。清坂さんがしょんべんたれてますとかなんとか書いて。その間美里は黙って座っている。動くなよ。そしたら先生は俺たちを理由つけて教室から出すか、なんかすると思うんだ。お前は一人のこって、言われる通りにしてたらいい。それで終わり。唯一の目撃者である俺が何も言わなければ、卒業までばれないだろ」
「貴史、あんたが黙っているかどうかが、鍵になるわけね」
　少しとげのある言い方を、私はした。

「清坂さん、静かにしてください」
　とうとう黒板内の『うるさい人』欄に書かれてしまった。
　沢口先生もじろりとにらんでいた。
　勝手にすればいいわ。
　私は貴史のノートの空いているところに、
『修学旅行前に直ってよかったね』
と書いてやった。
　案の定、貴史の返事は。
『修学旅行であれがこなければいいねえ』
　ふふんと鼻で笑って、とぼけてやった。
『あれって何、正式名称で言ってみな』
『お前ほんとに女かよ』

　本当に相談しなくてはならないことが、もうひとつあった。貴史をもういちどつついた。
「なんだよ、今度は俺が『うるさい人』になっちまうだろ」
「あのさ、昨日、木村から電話が来たんだけど。志村の転校が決まったからお別れ会しようって」
「なんで俺に連絡よこさねえんだよ。あいつ、美里に気があるのかよ」
「まさかまさか、木村の好きな子は、あんたもよおく、ご存知でしょうが」
　あれだけ派手にけんかしておいて、二日たったらけろっとして電話を掛けてくる木村。もっとも私としゃべることの多い男子は、けんかしてもさらっと水に流せるタイプの奴がほとんどだった。だから男子との付き合いは面白い。
　少なくとも三日続けて、無視なんてしないのだから。
「で、美里はなんて答えたんだ？」
「もちろん賛成に決まってるでしょうが。まあ、できれば一部の女子を抜いてほしいな、と願望は伝えておいたよ」
「すげえわがままな女」
　四年の時に同じクラスだった男子が転校するので、お別れ会をしようというお知らせだった。三組の面子でいろいろまとめるだろうから、日にちが決まったら絶対に誘うように、と念を押しておいた。
「でね、それだけで終わると思ったんだけどさ。木村、やっぱり気になるのかな。すごく言いずらそうでさ」
「代山をからかった件か」
「ううん、代山さんが、木村のことを嫌いになったかどうか、聞いてきたよ。なんでだろ。びっくり」
　そのことか、と貴史はつぶやいた。
「あいつは藤野にお熱だもんな」

「貴史はめったにからかわないねえ。木村に対してはさ」
「俺、ついていけねえもん。何が楽しいって。で、お前はなんて答えたんだ」
「そりゃあ、『なんでさ、あれだけ言葉の暴力ふるっておいて、いまさら好きになってくれって言いたいの』って」
「言うわけねえな」
「まさか、詩子ちゃんをあきらめてるわけないもんね、うそっぽいなあって思いながら言ったら、あいつ慌てて否定してるの。『違うんだよ、いいか清坂、言葉の暴力ふるわれてるのは俺の方なんだぞ。あの女、っていうか、あの女の周りにいる連中、しつけえしつけえ。試合にまでついてくるだぜ』って。もててることをのろけてるのか、って思ったけど、違ったみたいね」
「だいたい、想像はつく、かわいそうな奴」
　一週間前の日曜日、他校とのサッカー親善試合が行われ、四対三で負けた。私も観に行った。けど、一部の女子達が盛り上がっているのにはついていけなかった。
　サッカー部のミッドフィルダーである木村は結構目立っている。女子の間では人気も高かった。ファンの中に、どうやら代山さんも入っていて、きゃあきゃあはしゃぎながら取り巻き、追いかけまわしているらしい。また、代山さんの取り巻きは、ことあることに木村を捕まえては
「あんた、陽子のことどう思ってるの」
となじるのだそうだ。
　そりゃあ、好きになられるのは勝手だが、頼むから「きむらくーん！」と絶叫するのは止めて欲しい。
　さんざん冷やかされる。
　もっというなら、一部では両思いだと勘違いされてしまう。
　六年の先輩にはさんざんいびりの材料にされている。
　木村のいうこともごもっともである。
「確かに、この前の試合での盛り上がり、あれは異様だったよ。木村が嫌がる気持ちもわかるよね。嫌われたいの？って聞いたらさ、『わかってくれるか、清坂よ』だって」
「なんて答えた」
「それなら無理なんじゃないの。って。ついでに一言、『詩子ちゃんには黙っておいてあげる』と付け加えておいたんだ」
　貴史は笑いをこらえながら、指を二本立てた。
「ナイス、美里、よくやった」
　ちなみに、試合の日、詩子ちゃんは用事があってこなかった。木村にはそのこともちゃんと伝えておいた。

　好きな男子がいる、それはわかる。
　私もかつて何人か、好きになった男子がいたから。決して貴史ではなく、ある時は他組の転校生だったり、またある時はクラスの学級委員だったり。いろいろだった。
　でも、追いかけたりはしたことがなかった。私らしくない、と言われながらも口には出さず、

こっそり眺めているか、もしくは偶然をよそおってすれ違ったりする程度だった。
　よくもまあ、『だれだれが好き』と口に出来るもの。
　私はつくづく女子たちのことをすごいと思った。

　四年生の頃だったろうか。私と貴史がさんざん『好き合ってるよね』とかさんざんからかわれ、仲良し同士の会話すらできなくなった時期があった。顔を合わせるのもいやになり、貴史と違う組になりたいと真剣に悩んだものだった。
　でも、いろいろな出来事もからんで結局、
「言いたい奴には言わせておけ。話が合うのは貴史だけなんだから」
　と自分の中で割り切った。
　貴史とばか言い合ったりするだけの私は、代山さんたちからしたら子供じみて見えるのかもしれない。
　同じように、木村に焦がれる代山さんの姿も気持悪い。
　野生、そのものといった意地。
　ああ、やだろうなあ。
　私は木村に同情した。

その六　やってやろうじゃないの

「ちょっと角田さん、その指って何よ。「バリア」って、美里が何か汚いことしたとでもいうわけ？あやまんなさいよ！」
　詩子ちゃんはずっと私のそばで激しく言い返してくれた。
　私が何も言い返さないのを、『傷つきすぎたため』と受け取り、代山さんの取り巻きたちが投げつける冷たい視線、言葉に立ち向かった。
　すれ違うたびに「バリア」と呼ばれる、人差し指と親指を突き出すサインを出し、わざと机から筆箱を落としたり、給食を少なく盛り付けたり。そのたびに詩子ちゃんはとがめ立てた。頭ごなしに怒鳴るから、相手も血が上る。あやうくぱちんとひっぱたきそうになる。意外なことに男子連中は気を遣ってくれるのか、割って入ってくる。貴史の時もあったし、他の男子の時もあった。
　『人間失格』と言われたくない、そんな気持ちもあるのだろう。
　沢口先生に何を訴えても、私にはなんの助けにならない。
　よくわかっていたことだった。
「詩子ちゃん、いいよ。私、もうわかってるから」
「何言ってるのよ。美里らしくないよ。美里は何にも悪いことしてないんだよ。いいことしようとしただけなんだよ。なんで、角田さんたちに『バリア』されなくちゃだめなわけ？」
「詩子ちゃんが味方だってだけで、私は嬉しいから。大丈夫。こんなことで、清坂美里はめげたりしませんって」
　もう気にしないようにしよう、そう決めて、私は無視することにした。腹の中は煮え繰り返ることばかり、でも、心の奥で
「絶対、私はまちがってない」
という意地があったのも確かだった。詩子ちゃんも、貴史もみな私の味方でいてくれる。いつも通り、私とふざけあう友だちでいてくれる。
　代山さんの取り巻きたちに何責められたとしても、怖いものはなかった。

　木曜日の昼休み、放送委員はミーティングで放送室に行かなくてはならなかった。詩子ちゃんはいなかった。
　いつものように仲良し同士で鬼ごっこをするため外に出ようとした私を、呼び止める声がした。
「清坂さん、ちょっと」
　振り向くと、同じ組の角田留美子さんが立っていた。
「何か用なの」
「あるから呼んでるんじゃない」

　まだ文句をいいたいのだろうか。私は思わずにらみつけた。
「言いたいことがあれば、言えば。私が『人間失格』だとか、非常識だとか。もうそんなのなれちゃってるから平気だもんね」
「ここでは言いたくないから、ちょっと来てよ。あんたと話したいことがあるの」
「こそこそと言うようなことでなければ、ここでしゃべってよ。悪いけど、外で遊びたいから」
「ふうん、やっぱり、怖いんだ。藤野さんとか羽飛がいなければ、言い訳ひとつできないのね」
　しまった、と思ったが、美里も自分を止められなかった。
「なんで詩子ちゃんや貴史のことが出てくるわけ？　私が一人だと何もできないっていいたいの？」
「わかってるじゃない。今は清坂さんだけに話を聞きたいの。とにかく来なさいよ」
「しつこいわね、行けばいいんでしょ。いけば」
　連れて行かれたのは、一年生専用の女子トイレだった。すでに、一年生は午前中で下校してしまった。よっぽどせっぱつまった人でもいない限り、出入りしないであろう場所だ。
　リンチの場所としては最適のところだった。
　からっぽの、汲み取り式の和風トイレが十室、じめじめした雰囲気をかもしだしていた。扉の上には小さな窓がある。そこかだ光が差し込んできているので、真っ暗ではなかった。コンクリートの床が冷え冷えしていた。

　六年生の女子が夏休み前に、気に入らない女子を『リンチ』したという話を聞いたことがあった。人気のない場所でひっぱたかれたり髪の毛を引っ張られたりしたという。
　いつのまにか、代山さんの取り巻きらしい女子が五人ほどならんで待っていた。そして代山さんも背中に隠れて小さく背を丸めていた。私の顔を見ようとはしなかった。
「私に話したいことってなによ」
　誰も味方になりそうな子がいないのを確かめ、私は改めて怒鳴った。七人を前ににして、負けないよう目に力をこめた。
　弱くなってはだめ、負けない負けない。
「あのね、陽子はね」
　角田さんが口を切った。
「清坂さんのせいで一生消えない傷を受けたのよ。あんたが黙っていたらばれなかったのに。もう、陽子は恥ずかしくて外も歩けないのよ。清坂さんみたいに恥知らずじゃないからね」
　代山さんの顔を見た。うつむいて、今にも泣き出しそうな表情だった。
「そこでね」
　いきなり角田さんは私のスカートをめくり上げた。合図だった。ひざより長めの赤いプリーツスカートは私のお気に入りだった。朝、ジーンズにするか迷った。しまったと思う間もなく、周りの女子にけとばされ尻もちをついた、目の前がスカートの赤で埋まった。
「やめなさいよ！何するのよ！」
「成功。風呂敷つつみのできあがり」

　目の前が見えないため立ち上がるのも怖かった。がむしゃらに手をばたつかせ、スカートの真上で結ばれているところを必死でつまんだ。ちょうど、きつく結べる程度の長さだったのが不運だった。
「パンツ丸見えよねえ」
「恥ずかしいよねえ」
　声が聞こえる。頭の中がさらに混乱し、あやうくスカートのホックを壊しそうになった。幸い、結び目をいじくるうちにだんだん緩んできたのがわかった。ふわっとスカートが降りて、私は角田さんたちがくすくす笑っているのを見た。
　もう押さえきない。
　力いっぱい角田さんをひっぱたいた。
「人数がいるからって、甘く見るんじゃないわよ。一体何が言いたいわけ？　私、謝ったじゃない。代山さんに、『おもらししたことをばらしたこと』を謝ったでしょ。なのにずっとこんなことされる筋合いないよ。いくら沢田先生があんたたちをひいきしてるからって言っても、これはリンチだよ。どうする？　言いつけられるよ。この前の六年生のリンチ事件と同じようになったら、どうするの」
　頬を押さえている角田さんに、さっきまでけらけら笑っていた女子のひとりが駆け寄った。かっとなってはたきかえされるかと思い、私はさっと身をよけた。しかし、角田さんは両手を握り締め、私の目をじっと見詰めた。
「言いたかったら言いなさいよ。清坂さん。あんたが正しいことしてるって言い切れるんだったら。私のことを沢口先生がひいきしてるかどうか、そんなのわかんないけど、でも、あんたの性格最低だよ。『人間失格』って先生言ってたけど、今、本当にそう思った」
　あごで切りそろえたおかっぱ髪を振りながら、角田さんは続けた。一重まぶたで、ぴたぴたしたショートパンツ姿だけがやたらと目立っている女子だった。そんな格好してたら太って見えるのに、身体のラインがまるみえの格好でくるんだろう。私はいつも不思議に思っていた。
「角田さんにそんなこと言われたくない」
「私だって言いたくないわよ。あんたなんかとは、こんなことがなければ言い合いする必要なんてなかったよね。陽子のことがなかったら。いい？　清坂さん。私が一番むかむかするのは、あんたがいつも、自分を正しいと思い込んで、私達に迷惑かけることなのよ」
「正しいことを正しいって言って、どこがいけないのよ」
　角田さんの言葉に気押されそうになりながら、私はさらに両足を踏ん張った。動けなかった、と言った方が正しい。五年四組の中で自分が好かれているとは思わなかったし、特に沢口先生からはとことん嫌われているということにも気付いていた。しかし、好き嫌いはともかく、人がいじめられていたらかばうのが当然、私の正義だった。たとえ自分と仲のいい友達であっても、間違っていたら指摘するのが当然だと思っていた。
　それがいけないことだったのだろうか。いや、そんなことはない。
　スカートをめくられて茶巾縛りされるようなことは、全くしていないつもりだった。

「清坂さん、あんた、謝ったから許されると思ってるでしょ」
　一息ついた後、角田さんはゆっくりとした口調で言った。
「今も言ってたよね。『謝ったでしょ。謝ったでしょ』って。でもね、謝っても許されないことってあるし、人の心につけた傷は、簡単に治らないものだと思うよ。今回のことだけじゃなくて、いつもそうだよね。好きな人の話してても、『私、そういうの関係ないから』とか言ってさ。無視するんならそれでもいいよ。なんで、私達の前でそういうこと大声で言うわけ」
「本当に関係ないことを、そう言っちゃいけないってわけ」
　話が飲み込めず、私は言い返した。
「そのくせ、男子たちと遊びまわってるくせに。自分が仲いいからって言って、仲良くなれない女子を馬鹿にした目で見ることないじゃないのよ」
「別に、私、そんなことしてないじゃない。何勘違いしてるってわけ。たまたま仲いい男子がたくさんいるのは私の責任じゃないし、女子だって、あんたたちじゃないけれど友だちいるもん。素直にそう言ったのが悪かったってわけ？」
　私は女子よりも男子と馬鹿やって騒ぐことが多かったし、女子の親友といえる相手よりも貴史の方に話す方が気楽だった。でも、それは自分の性格だし、文句をいわれる筋合いはない。さらに言うなら、男子を意識して陰できゃあきゃあ言って嫌われるよりも、言いたいことを言って騒ぐほうがずっと楽しいのに。意識しないでつぶやいた言葉が、もしかしたら角田さんの耳に届いたのかもしれない。ただし、大声で言ったりした記憶はない。
「でもさ、木村くんの前で言うことはないじゃない。そのくらいのデリカシーは欲しいよね。ね」
　周りの女子に同意を求める角田さん。ひとりひとりが頷いた。
「何を言うことないじゃないって？　ああ、代山さんがおもらししたことでしょ。でもからかってきたのは木村なんだから、あいつに言い返さなくてどうするって言うのよ」
　しばらく、角田さんたちは黙った。お互いに顔を見合わせ、何かを目で伝え合っていた。目つきがねばっこい。そういう表情が美里は大嫌いだった。こういう目で語り合った後、美里たちに向かって「ふうん」といった表情を見せる。むかむかした。
「清坂さんが非常識だっていうのは、今言ったことだけどね。あんたってよく、陽子の前で『おもらしした』とかいえるよね。普通、本人がいるんだったら、そんなこと言わないでしょ」
「だって、したことはおもらしなんだから仕方ないじゃない」
「恥ずかしいことを何度も繰り返すのはやめてよ。陽子が思い出したくないことを、清坂さんは何度も言って、周りの人たちに思い出させてしまったんだから。あれでもう、五年生の中で陽子の……したことは、忘れられないことになっちゃったじゃない。清坂さんが何も言わないで、無視していたら、あんなことにはならなかったよ。清坂さんは陽子をかばったとか思ってるかもしれないけど、沢口先生から『人間失格』にならないように、みんなであの時起こったことを忘れようとしていた四組のみんなは、無視してようと決めてたのよ。みんなが一丸となっているのに、どうして清坂さんは平気で混ぜ返すわけ」
「だって、私は間違ったこと、何もしてないもん。そこまで言うなら、私だって言いたいことあ

るよ。実際起こったことをなかったことにしようなんて、良く平気で言えるよね。代山さん、確かにかわいそうだなって思う。でも、どうしてそんなことになる前に、トイレに行かなかったの。それが私には不思議。あそこでしちゃったら、どういうことになるか、わかってたはずよ。五年生なんだから、それくらいできるよね。で、そのあとみんなにかわいそうがられて、うっかりかばっちゃった私がこういうリンチにあって。ばっかみたいよね。私がすべて悪いみたいで」
「そんな目にあったことないくせに、よく言えるわね、最低女！」
　代山さんは黙ってうなだれていた。本当の声が聞きたいのは、代山さんの方にだった。代山さんが何を考えているのかわからかった。どうして、あの場所でトイレに行かなかったのか、どうしてあそこでもらしてしまったのか、どうして、何も言い訳しないで泣いていたのか。私には全く理解できなかった。
　角田さんは激しく首を振って、さらに続けた。
「あんた陽子がどんなにつらい思いしたか、想像つかないほど、ばかなのね。想像してごらんなさいよ。もし、清坂さんが陽子みたいなことになったら」
「私だったら、その前にトイレに行くって言うわ。だって、そこでしちゃったら、ずっと言われることになるんだから。そのくらいの想像はつくわ」
「男子がいっぱいいるのよ。そこで立てると思う」
「平気よ。もちろん。それにもしも、本当にちびってしまったら、私だったら……」
　しまった、口をすべらせた。がまんできなかった。
「私だったら、他人に手伝ってもらわないで、自分で後片付けするわよ。泣いて貴史たちの助けなんて借りないで、ちゃんと自分でぞうきんもって、片付けて、ひとりで保健室いって、着替えて、帰る。そのくらいの覚悟がなかったら、あんなとこで、おしっこなんてできない」
「どこまでいうなら、じゃあ、やってみてよ」

　角田さんの言葉が、一言、響いた。
「明日の五時間目に」
　代山さんをちらりと見て、
「トイレに行きそびれてちょっとした失敗してみてよ」
「どういうこと？」
　心臓がどくどくと波打ち、自分が先走りすぎたことに、やっと気付いた。
「そして、自分できちんと片付けられるかどうか、やってみてよ。出来ると思う？　陽子のことをばかにするだけのこと、できると思う？　もし平気な顔をして、雑巾で拭いて、先生に報告できるんだったら、私はもう清坂さんに何も言わない。でも、自分で何も出来ないくせして、陽子を傷つけるんだったら絶対に許さない」
　手がだんだんがたがたと震えてきた。
　私、とんでもないことになりそうよ。どうしよう。
　誰かに助けを求めたかったけど、誰もいなかった。
　本当に私はひとりぼっちだった。

「もし、それがいやだったら、明日帰りの会で、みんなの前で、土下座してあやまりなさいよ。沢口先生も言ってたし。清坂さんがあやまらない限り軽蔑するってね」
　冗談じゃない。
　教室で、土下座して、あの沢口先生、そして角田さん、代山さんに向かって頭を下げるなんて、絶対に嫌だ。
　うしろにひっこんでおどおどと背を丸めている代山さんの姿を改めて見た。
　もし、私が、したとして、みんなに気付かれたとしても、あんな態度は絶対にしない。
　絶対、にするもんか。
　次の瞬間、勝手に言葉が飛び出していた。
「いいわ、やってやろうじゃないの。明日、図工の時間に、堂々と、すればいいんでしょ。ちゃんと一人で片付けて、着替えて、泣かないで、後始末してみせる。私はそれができるもの。もし私がそうしたら、角田さん、あんたの方こそ帰りの会で土下座しなさいよ。私をリンチしようとしたこと、ばらすから」
　鐘が鳴り、私は背を向けた。次の授業は社会科だ。沢田先生にまた何を言われるかわからない。
　角田さんたちは追いかけてこなかった。言い切った時のすがすがしい気持ちが、教室に向かう廊下の元でだんだん薄れ、席につく頃にはわけのわからないみじめさに変わった。

　隣の席で貴史がノートにアニメのイラストを書いている。息を切らせて詩子ちゃんが放送室から帰ってきた。のそのそと角田さんたちが戻ってきた。代山さんがおどつきながらその後に続いていた。
　土下座するより、ずっとましよ。
　私、間違ったこと、言ってないんだから。
　私、自分のことはちゃんと自分で始末できるんだから。
「どうした、美里。腹痛いのか。さてはあれなのかよ」
　ふだんなら「うるさいわね！このドスケベ！」と張り倒すのが常だろう。
「んなわけないでしょ」
　力なく答え、それっきりにした。

その七　たしかにそうだけど

　次の日、昼休み、なんどかトイレに足を運ぼうとした。でも、角田さんたちの視線を感じるたび、つい反対側を向いてしまった。
　面白がるように角田さんのまなざしは自由自在にさまよい、私を追いかけていた。
「清坂さん、おトイレ？」
　いやみな女だ。
　つぶやきながらも私はわざとにっこりと答えた。
「ううん、他の組に行くのよ」
「ふうん、今日、清坂さん、一度もトイレ行ってないんじゃないの」
　男子のいる前でわざとらしく、声をかける角田さんがいた。
　朝からずっとだった。もっとも誰も、私と角田さんとの間に流れている不穏な空気に、気付いていないようす。それが救いだった。前の日、スカートめくりの茶巾絞りをした女子五人は、何も言わずにただ、じとっとした表情で私を監視しているようだった。代山さんがどういう顔をして見ていたのか、そこまではわからない。
　私は自分のことだけで精一杯だった。

　四時間目までは先生の声も聞いていられた。
　だが、給食開始五分前あたりから、ぽわぽわ頭の中が騒ぎ出し、足の指先がじんと痺れ始めた。学校に来てから一度もトイレに立てなかった。手を挙げて行かせてもらおうかと、迷うたび、昨日交わした角田さんとの会話を思い出し、ぐっとがまんする。それの繰り返しだった。
　こんなに苦しいのは初めてだった。
　給食の時も、ぐっと足を締め付け、何も考えないようひたすら食べることに専念しようとした。でも、口に入れられなかった。おなかがすいているのに、スプーンですくう手が震えてしまう。
　背中から詩子ちゃんがいぶかしげに尋ねてきた。
「美里、顔色悪いよ、どうしたの。保健室に行く？」
　答えるのも少しずつ。二言三言。
「平気、なんでもないってば」
　ちらりと代山さんと角田さんたちの方を見た。給食時間が終わりになると、みな仲のいい女子同士固まって、いろいろとおしゃべりしたり、小物の交換会を開いたりするのがいつものことだった。この日は、私の方をじろじろ見つめて、こそこそ話をしている様子。でも、似たような状況は続いていたから、詩子ちゃんもさほど気にしなかったのだろう。
「また何か言われたのね。角田さんたちに。無視しちゃいなよ」

「わかってる」
　詩子ちゃんはにらみ返した後、髪の毛をまとめながらつぶやいた。
「今日の帰り、公園に寄ってっていい？」
「どうしたの、いきなり」
「秘密、あるんだ」
　もしかして、木村に告白されたんだろうか。
　聞いてみたかった。でもまだ男子がうろうろしている教室で、話してくれるわけないだろう。
「うん、あとで教えて」
　結局、パンは全部持ち帰り、おかずはほとんど食べず、牛乳だけやけ気味に飲み干し、私は給食ナフキンをたたんだ。
　唇をかみ締め、もう一度角田さんたちのいる方を向いた。
　わざと笑って見せた。
　あっちだって笑っているだもの。負けるもんか。

　勢いで、『ちょっとした失敗』をしてやろうと言い返してしまった自分、帰り道、学校に来る間、そして授業中、何度も悔やんだ。
　だって、私は代山さんと違って、自分のことは自分で始末できるもの。
　代山さんはただ、がまんできなくて、自分で何もできなくて、しちゃっただけだもの。私は違う。きちんと取り替えるものだって用意してきた。スカートだってあるもの。ぞうきんと新聞紙がどこにあるかもちゃんと知っている。
　してしまったら、確かめた後でゆっくり立ち上がるんだ。先生にちゃんと言うんだ。『失禁』してしまいました。自分で片付けます」って。あとは一人で片付ける。トイレで着替えて、もういちど戻ってきて、ちゃんと帰りの会に出て、帰る。
　私だったら、かばってもらえないってわかっている。角田さんたちのような友達、私はいるようでいないもの。
　私は自分でしたことを責任取ること、こわいと思わない。
　絶対に、代山さんみたいに、泣いたりなんてしない。

　休み時間は、意味もなく廊下をうろうろしているうちに過ぎた。五時間目は図工だった。先週行われた写生遠足の下書きに、色を塗る作業だった。筆洗いに瑞をたっぷり組み、足を何度か組みなおしながら絵の具を溶いた。
　限界はちくちくと迫っている。
　今ならまだ、間に合うな。
　ひざとひざをぴっちり付け、身体ごと堅くした。足、太ももがじいんと熱くなった。足首が気持悪いくらいくりくりと回った。
　隣で貴史が、山の連なりをべとべとに緑色に塗りたくっていた。画用紙の上なのに、どこか油絵っぽいタッチだった。以前、図工の授業で美術館に油絵を見に行った時、貴史は猛烈に油絵

を書きたがっていた。私から見たらそれは手抜きとしか思えない描き方だった。直接筆に絵の具をこんもり盛って、画用紙にたたきつけている。
　水性絵の具の量はもともと少ないもの。とっくに切れていた。気付くやいなや、私の絵の具箱に手を伸ばし、緑と黄緑を大量に搾り出した。
「あとで、金銀の絵の具やるから、気にするなよ」
　私は答えられなかった。
「なにむくれてるんだよ」
　茶色の瑞が筆箱の中にたまっていた。貴史は自分の筆をその中にじゃぼんと入れた。ほとんど黒に近い焦げ茶に染まった。細かな水はねが私の画用紙にばらばら落ちた。青空の部分だから目立ちそうだ。
「わりいわりい」
　両手を合わせて拝み倒そうとする貴史。
　私は何も言うことができなかった。
　お化けがかごめかごめをして自分を囲んでいるようだった。
　おなかの力を抜いて、温かいものが流れたとたん、私は何を失うのか。
　いくら後片付けをきちんと済ませたとしても、みなあきれるだろう。
　詩子ちゃんも、そして貴史も。
　とんでもない条件を飲んだ私を馬鹿にするだろう。
　これから私を「五年生なのにトイレに行きたいと言えなかった」ばかな女子だというだろう。

　ちゃんと準備していると言っても誰も聞いてくれないだろう。
　私は、代山さんとは違うもの。自分のことは自分でできる。
　聞こえないように唱え、美里は目をつぶった。息を止め、少しずつ吐き出していった。うっかり大きく息を吸うと、おなかがゆるんで、止めようがなくなる。絵の具を持ったまま、手をひざにおき、ぎゅっと握り締めた。

　私は貴史のささいな言葉で、何を考えているか読み取ることができた。
　互いのちょっとした態度の変化で、すぐにわかってしまう。なぜかはわからない。他の女子とはそういうことがないのに、どうしてか貴史だけにはそれが通じる。
　誰が嫌いで誰が好きかも、口に出さなくてもすぐにわかる。詩子ちゃんには隠し通せたことも、貴史にはあっさり見抜かれた。
　その証拠に、私の耳に聞こえてきたのは、直球そのものの声だった。
「さっさとトイレ行ってこいよ」
　そうできたらとっくの昔に駆け込んでいる。そう答えたかった。言えるわけがなかった。
　相手は貴史なのに、口が利けないよ。
　私はか細い声で、強い口調で答えた。
「あんたの知ったことじゃないでしょ」

「ここでちびられたら、始末するの俺だぞ」
「あんたには世話かけないわよ」
「なわけないだろ。全く、早く行って来いって」
「大丈夫、あんたには迷惑かけないから。向こうに行っててよ」
　あごのあたりがふるふるしてきた。
　貴史に気付かれたのが、なぜ今、こんなに恥ずかしいのかわからなかった。
　今までならば平気で、「トイレに行きたい」といえたのに、今はその素直な言葉すら発せられない。どうすればいいのかわからなくなっていた。

　貴史に、おもらししたところ見られたくないよ。
　代山さんは自分のおしっこを貴史に拭いてもらったけれど、私、そんなの絶対嫌だ。
　貴史の前で、ちびってしまうなんて。
　身体がばらばらになってしまいそうだ。いや。そんなの絶対嫌だ。
　代山さんもあの時こんな風に考えなかったのだろうか。私は横目でかすかに首を動かし、代山さんを見た。何も考えずに色を塗っているように見えた。
　がまんできなくなったとき、こんな姿を見られたくないと思わなかったんだろうか。
　木村のことが好きなのに、近くの席にいるのに、好きな人の前でしてしまうくらいだったら、死んでしまったほうがましだとか思わなかったんだろうか。
　私なんて、貴史ですら、絶対いやだと思ってるんだから。好きな相手だったらなおさら、そうじゃない。
　私は貴史が好きなわけじゃない。でも仲良しだとは思ってる。
　本当の仲良しにはまじりっけのない気持で付き合ってほしいし、軽蔑なんてされたくないよ。
　角田さんたちのようなかばい方もされたくない。
　けど、きっとみんなそうなんだろうな。

　いきなりおなかからうねりがきた。
　私は両膝を押さえ、椅子に座ったまま前かがみになった。
　急に波のようなものが押し寄せてきたからだった。自分の力では押さえられなさそうだった。息のかすれる音が口から漏れた。
「もうだめ」
　知らず知らずのうちにつぶやいていた言葉。誰にも聞こえていない、そう信じたかった。
　もう立てない。もう動けない。もうがまんできない。どうしよう。これ以上動いたら、本当にその場で破裂してしまいそう。
　絶対、そんなことしたくないのに。今から行っても、もう間に合わない。どうしよう。
　角田さんと賭けた土下座のことなんて、どうでもよかった。
　ただ、貴史に始末されるのだけは絶対に、嫌だった。
「美里、動くなよ」

　貴史の声が耳元でした。え、なに？と尋ね返そうとしたとたん、ひざにひんやりした感触が残った。と同時にこげ茶色が広げてあった画用紙一杯に広がり、ぽたぽたと机の上をぬらしていた。べとんとした画用紙。広がる黒い水。そして、スカートの前いっぱいに、しみが広がった。黄色いスカートだったので、絵の具の色はさらに目立っていた。
「貴史、あんた」
　私はひざに置いていた手を離した。瞬間、暖かい波がくるくる私のそばでうねり、そして流れていった。

　何秒くらいたっていたのかわからない。私は座ったまま凍りついていた。机の下を見ることができなかった。どれだけ水たまりがひろがっているのかわからなかった。立ったら、びしょぬれのスカートが目立ちそうで動けない。
　貴史がひざにかけた水入れの絵の具水が広がっているので、自分がしたおしっこの色は見えなかった。
　まだ、誰も気付いていないようだった。
　スカートがすうっと冷えていった。波が来た最初はあたたかくて、夢の中にいるようだった。でもじゅくじゅく足に伝わっていく感触に気付いたとたん、身体が硬直した。頭の中の電球がぷつんと切れた。
　ひとりで、後始末なんて、できない。
　腰があがらない。こんなはずじゃなかった。顔をすっくと挙げて立ち上がり、水溜りを拭いてしまうはずなのに。
　代山さんと同じになっちゃう。
　さんざん馬鹿にしていた代山さんみたいになるなんて、いや。でも顔があがらないんだもの。立てないんだもの。早く、先生に言いにいかなくちゃいけないのに。早く着替えてこなくちゃ。みんなまだ気付いてないんだから。角田さんたちに気付かれて、「清坂さんがおしっこたれてまーす」と大声立てられないうちに。

　冷たい水が降った。
　水滴が目の前をぽつんぽつんと落ちてくる。息が止まった。
　その音で、ざわめきがようやくなり響いた。
「貴史、あんた、美里に何したのよ！」
　詩子が食ってかかっていた。髪の毛、机、椅子、描き掛けの絵、ブラウス、そしてスカートがみなずぶぬれだった。
「だってさあ、美里俺の水入れをこぼしやがってさ、自分の絵だけならともかく、俺の芸術作品まで全部台無しにしちまうんだぜ。さっきだって、俺がもしバケツの水ぶっかける根性あったら、俺の絵をもっと『格調』高く仕上げてやるとかぬかすんだもの。だったら、やるしかないよな。まあ、俺の油絵チックな芸術にはかなわないかもしらねえけど」
「何馬鹿なこと言ってるのよ。美里、風邪ひいちゃうよ」

　沢口先生も事態にようやく気付いたのか、怒鳴り声で貴史を呼びつけた。
「羽飛、ちょっとこい、馬鹿やろう！」
　貴史はちらっと私と目を合わせた。何も言わなかった。ただ何かを確認した後、しおしおとおとなしく、往復びんたを受けに行った。沢口先生は、気に入らない男子については体罰を平気でする教師だった。
　ばしりと、二回聞こえた。
　私はそれを見て聞いた。とたん、身体の芯がしゃきっと通った。

　目が醒めた。夢から覚めた。片付けられる。
　雑巾を持ってきてくれた詩子に「ありがとうね」とお礼を言い、私は立ち上がった。代山さん、そして角田さんの方をじっと見つめ、わざとスカートの後ろが見えるように背を向けた。
　見る人が見れば、上からかぶせられた水だけで、スカートの後ろがびしょぬれになるなんてことはないとわかるはずだった。
　角田さんには通じたらしい。一声飛んだ。
「あれ、清坂さん、なんでスカートの後ろ濡れてるの。へんなの、おもらししたみたい」
　詩子ちゃんが何か言い返そうとするのを、片手で制し、私は無理やりにっこりして言い返した。
「そうよ、私、おもらししちゃったの」
　詩子ちゃんが手伝おうとするのを断固として拒否し、私は床、机の上、椅子の上、ついでに貴史の椅子まで全部雑巾で拭いた。
　絞りにいくため廊下に出た際、こっそりその雑巾を外に捨てた。

　貴史と私の、相変わらずの悪ふざけで、私がとばっちりを受けた、ただそれだけのこととして処理された。
　私は角田さんとの賭けに、勝ったはずだった。
　自分で片付けたし、涙ひとつ、こぼさなかったから。
　ただ、ひとつだけ変わったことといえば、
　もう代山さんを、「五年生の癖に」といえなくなった、ただそれだけだった。

その八　いつかくるときがくる

「羽飛って、とんでもない奴ね。美里と仲いいのは知ってるけど、あれでも」
　詩子ちゃんと約束していた関係もあり、私は帰りの会が終わるやいなや、すぐ玄関に走った。着替える余裕もなかった。なんとなく臭うのが気になる。だいぶ乾いてきたのが救いだった。
　遠回りの道を通って帰りたがっている様子だったので、すなおに従った。
　本当はひとりで物思いにふけりたかったけれど、詩子ちゃんが切なげに私を見つめるので、しかたない。
「美里、前から思っていたんだけど、羽飛のこと好きなんじゃないの。ただの幼馴染にしては仲良すぎるもの。バケツで水かぶせられても平気でいるなんて、変よ」
「そんなんじゃないわよ。私、好きな奴なんていないわ」
　詩子ちゃんとは違った意味で、好きという言葉に抵抗があった。
　たとえば、代山さんをはじめとする女子の一部は、木村を好きで好きでならなくて追い掛け回している。
　好きでいるということが、そういうことだったら私には全く関係ないことだった。
　また木村の方は詩子ちゃんに思い焦がれているらしいが、向こうから直接声を掛けてきたり、つきあいをかけたりなどとはしていない。『好き』だったら、もっと自分と同じような感じで詩子ちゃんに話し掛ければいいのに。
　私にとっての貴史とは、もうひとりの私だった。
　好きとか嫌いとかを越えた、離れることが信じられない相手だった。ただそれだけだった。
「詩子ちゃんは誰か好きな人いるの」
「いるわけないじゃない。男子ってみんながきくさいもの」
　いつものように詩子ちゃんはとがった言い方で答えた。どうして男子をここまで嫌うのか、私にはわからない。
　詩子ちゃんは妙にそわそわしていた。長い髪の毛を両手で背中に払うと、人気のない児童公園のベンチまで歩いていった。コンクリートの、堅い灰色のベンチだった。
　詩子ちゃん、思いつめてるな。
　私の方がどきどきし始めた。詩子ちゃんは何かを言いたそうだった。
　もしかして詩子ちゃん、もしかして。
　詩子ちゃんは指でひし形をつくって見せた。
　女子の間では、『あれ』と呼ばれる暗号だった。
「もしかして、詩子ちゃん」
「あ、れ、が。はじまっちゃった。まだ美里にだけしか言ってないんだ」
　これだけ一息で言った。

　見かけの大人っぽさと口調の不安定な様子が、しっくりこない。頬を抑え、詩子ちゃんはうつむいた。
「いつ？　今日？」
「うん、昼休み、保健室に行って、初めてわかったの。五時間目、絵を描いているときもずっと変で」
「どんな感じだったの」
　その問いに詩子ちゃんは答えなかった。風と一緒にすり抜けてゆきそうな、とりとめのない言葉を口にした。
「……みんなああいう風になってるのかなあって、女子の顔ひとりひとり見ちゃった」
　くらくら、力なく詩子ちゃんはつぶやきつづけた。
　詩子ちゃんはきっといやなのだろう。自分の身体がある一線を越えて大人の世界に取り込まれたことが。私のように貴史を意識しないで、じゃれていられる、そんな時間が消えていくのが惜しいかもしれない。
　私はそっと詩子ちゃんの顔を覗き込んだ。髪が揺れていた。
「だれにも知られたくないよね」
「そう、なの？」
「言いたくないよ。あんな汚いこと、どうして言わなくちゃいけないの。親に報告しなさいって、保健の先生言うのよ。絶対嫌よ。わかるでしょ、美里」
　わからなかった。うなづく代わりに目をそらした。
　詩子ちゃんからなまぐさい匂いはしなかった。
　けど、この間も詩子ちゃんは血を流している。
　手を切って傷から血が出たら、そのままほおっておかず、ばんそうこうを貼る。そのままにしておくことはまずない。詩子ちゃんはトイレに行けば、いつでも流れっぱなしの血を見ることになるのだろう。どんな感じなのかは想像つかなかったけれど、きっと気持悪いものにちがいないだろう。
　あんな汚いこと、と詩子ちゃんは言った。
　べっとりついた血を見なくてはならないのが大人だとしたら、私は大人になんてなりたくない。
　しばらく私は詩子に付き合った。スーパーにより、お菓子と一緒にナプキンを買った。レジのおばさんがそれだけを紙袋に包んでくれた。いかにもわかっているよといいたげな顔でにっこり笑った。詩子ちゃんは頬をあからめてかごの中のものにじっと視線を落とした。

　詩子ちゃんと別れ、やっと一人になれた。
　さっきから気になってしかたなかったスカートをはきかえたかった。大急ぎで公園に戻り、公衆便所に入り、濃紺のスカートから緑色のキュロットに着替えた。
　一応、着替えまで用意してきていた。
　もう二度とこのスカートを見たくなかった。

　どんなに洗濯しても、落ちない匂いが残っていそうだから。

　事情を知らない詩子ちゃんが憤るのもわからないわけではない。いきなり冷や水ぶっかけられた私が、口も聞けないほど驚いていたと詩子ちゃんは思っていたのだろう。
　だけど、私は貴史のしたことについて、一言も弁護することができなかった。貴史はいい奴だよ、と言い返すこともできなかった。何で、と問い返されたら、理由を言わなくてはならなくなるから。まだ口にはできないことだった。
　貴史が機転を利かせてくれたから、私は恥をかかないですんだ。貴史が水を浴びせてくれなかったら、水たまりの中で、離れ小島のように小さくなっていただろう。様子がおかしいと誰かが言い出す。床、椅子顔を順繰りに眺め、それでも表向きは『かわいそう』と言ってくれるだろう。
　角田さんたちは、
「口では大きいこと言ったくせに、やはり自分がやってしまうと、手も足もでないのね。赤ちゃんよね」
と指を差して笑ったことだろう。
　言い返せなくなってしまった。
　自分のことをずっと信じてきたのに、今あっさりとくつがえされてしまった。
　お片づけがちゃんとできる「清坂さん」ではなくなっていた。
　代山さんの立場が、なんとなくわかったような気がする。
　貴史がいきなり筆荒いの水をひざにこぼしてきた時、力が抜けて、はちきれてしまった時。
　あの時、ずっとがまんできると思っていたのに、できなかった。
　頭がわんわん言って、身体が熱くほてって、何もみえなくなっちゃった。
　ずっと、覚悟は決めていたのに。
　耳ですごい音が響いているのに、誰も気付いていなくて、それがもっと怖かった。
　自分が自分でなくなったみたいだった。
　あと、五秒、遅かったら。
　私、泣いていたかも知れない。

「美里、美里」
　タイミングが悪すぎた。すっかり着替えた後に貴史が来るなんて。
隠そうとしてまにあわなかった。
「なんだよ、その顔さ」
「いいじゃない、なんだって」
「そんなこと俺に言っていいのかよ」
　真正面に立ったまま、私の髪の毛をぐいと掴んだ。
「しょんべんたれたくせに」
「別にあんたに、かばってほしいって言ったわけじゃないもの」

　涙が出そうで出ず、中途半端な気持がじゃまして、きつい言葉しか出てこなかった。
「あれ、誰も気付いてないと思ってるんだろ」
「ああ水浸しになったんだから」
　冷たく言い返した。
「どうせ、わかることよ。におったでしょ」
「お前、角田たちになにかされたのか。しょんべん行くなって言われたのか」
「それなら、授業中に行ったもん、行きたくなかったから、行かなかったのよ」
「がまんくらべかよ、ばっかみてえ」
「それなら帰りまで絶対しなかったもん」
「美里、まじめに答えろよ」
　貴史は靴の先で穴を掘りながら尋ねてきた。
「お前、どうしてあんなこと、しなくちゃなんなかったんだ。ふだんの美里なら、平気で抜け出してたくせに」
「どうして角田さんたちが怪しいと思うの」
「お前が教室出た後で、俺に文句つけてきたからな。『あんた、清坂さんがおしっこもらしてたの知ってたでしょ』とかなんとか。俺はとぼけといたから安心しろ」
「私も……やるって、言ったから」
「何考えてるんだ、ばか」
　いつもらしくない貴史の口調が、ふと怖くなった。
　やさしすぎる響きだった。
「それでわざとちびらされたって、わけか。なら話は通じるぜ」
「もうわかってるんだったら、思い出させないでよ」

　本当は電話で、みんな話すつもりでいた。
　私の意地っ張りな性格が災いして、その場でやるしかなかったこと。
　自分で堂々と始末できると信じていたこと。
　でもうまくできなかったこと。
　そして、貴史にごめんと一言。
　反対のことしか言えなかった。

その九　しかえし

　ことの発端に何がおこったのか、と言えば、
「先生、トイレに行っていいですか」
　角田留美子を始めとする、女子の一部が連鎖反応で、５時間目の道徳の時間に中座したという、ただそれだけの話だった。
　せっぱつまっていたらしい。顔を赤らめてスカートを握り締め、ろう下を全速力で走っていった。
　よくあることだった。多少、敏感になっていたきらいはあるにしても、美里もたいして気にはしなかった。

　図工の時間以来、美里と留美子とは一切口を利いていなかった。結局、美里はその場でしてしまったけれども、先生には報告しなかったので、百パーセント勝負に勝ったとは言い切れなかった。かといって留美子も、スカート茶巾絞りして美里をリンチしようとしたことを知られたくはなかったらしい。
　それゆえ、二人が取った方法は、かかわりあわないようにすることだった。
　詩子も不思議そうに尋ねたものだった。
「美里、角田さんになにかしたの？　あれ以来、ぜんぜんつっかかってこないね」
　まさか、美里も本当のことを言えず、笑ってごまかすのみだった。
「わかんない、私もどうでもいいもん」
　つっとんげんな態度で貴史に答えた日以来、そっけない態度を取りつづけている。隣の席にいるし、鉛筆とか消しゴムを忘れたりすることも多いので、しかたなく「貴史、消しゴムかして」程度の会話はする。でも、貴史は黙って差し出すだけだ。
「羽飛とも最近、冷たいみたいね」
「さあ、単なる隣同士だから」
　複雑な思いで美里は答えた。
　でも、貴史の態度にはどことなく、甘い隙間が見え隠れしていた。たぶん、一緒にいた時間が長いからわかることなのかもしれない。たまに美里の方を見つめ、ぽそっと
「馬鹿野郎だよな」
とつぶやくのを聞く。
「誰のことよ」
と言い返すと、
「関係ねえだろ」
とそっぽを向く。

　その際に空く、一秒の間、貴史の表情が何かを言いたそうになる。思わず、首をかしげてしまう。
「でも、なんだか最近の羽飛、美里のことをじっと見ているね。まあ、美里が関心ないんだったらいいけどな。男子のことばっかり考えてる女子じゃないから。美里って」
　詩子との会話はそれで終わった。たぶん貴史は自分のことを嫌っていないだろう、とは思うけれども、どことなく不気味に感じるのも確かだった。
「詩子ちゃんはあんまり男子のこと好きじゃないよね」
「面白くないものね。ぜんぜん、話していて、単純だから」
「誰とはいえないけど、詩子ちゃん、もててるんだよ。知らないかもしれないけど」
　木村の想いがあまりにも詩子一筋なので、たまにこうやって探ってみたりもするけれど、
「いいの、私は美里がいればいいんだ」
　詩子ちゃん、私のことをたぶん親友だと思ってるよね。
　美里はそう考えるたび、つい首を傾げてしまった。
　親友だったら、どうして私、角田さんにリンチされそうになったこと、言わなかったんだろう。
　やっぱり、話したくなかったからだよね。
　私の思う親友って、そういうことを平気で話せる人だよね。
　誰なんだろう。

　授業が終わり、しばらく間があった。先生が来るのが遅かったせいだった。帰りの会を日直が開こうとして、教壇の前に立ったとたん、沢口先生が険しい顔で押しとどめ、席に戻るよう促した。
「これから、四組の特別授業を行う。全員、残れ」
　なんでだろう、やだなあ。早く終わればいいのに。美里も何がなんだかわからなかった。貴史も詩子も、めんどくさそうにランドセルを椅子に掛けなおしただけだった。

「まず、全員目をつぶれ。思い当たる節のある者は手を挙げなさい」
　まぶたは閉じたが、美里は薄めを開いた。伏せ目にしておけばたぶん気付かれないだろう。国をかしげて貴史の様子をうかがおうとした。
　奴は真っ正直に目を閉じている。
「第一の質問だ」
　やましいことをしていない美里は心安らかに聞いていた。
「この組のある女子が、クラスメートの男子にいじめられていると、５時間目が終わった後、先生のところに報告があった。先生はそれが誰だか聞いている。だが、先生としてはそんなことをした人がいないと信じたい。もしいたとしてもすでに反省していると思いたい。思い当たる人は、怒らないから正直に手を挙げてほしい」
　五秒数えた。身動きなし。空気の動きすらない。

「このまま言わないで入ると、こちらから言うことになるぞ」
　沢口先生の声は険しい。誰一人、手を挙げる気配なし。
「本当に、いないのか」
　他の組が解放され、はしゃいでいる声が響き始めた。しかし、四組の中は静かだった。さらに五秒数えた。
「この、大うそつきめ。羽飛、貴様だ！」
ぱっと目を開けた。胸倉をつかまれて貴史が拳固で殴り飛ばされていた。椅子にぶつかり、後ろの席にいた子の机がひっくり返った。息が止まりそうだった。美里の隣で貴史は左の頬を抑え、歯を食いしばり、寄りかかっている。
　沢口先生の気迫に飲まれ、誰も声を立てない。
　貴史の表情はこれまで一度も見たことのないくらいきつくするどかった。
「ここまでお前が根性まがりだとは、先生も思っていなかったぞ。羽飛、女子トイレの前に『清掃中』の札をかけてまわったのはお前だそうだな。それも学校中をおさえて、朝から今まで」
　え？
　そんなこと、してたっけ？
　あいつすけべなこと考えていたんじゃないの？
　美里の背中越しに、知らない連中の発する疑問が飛び交っていた。でも答えはどこにあるのか見えている。角田留美子、そして代山陽子たちのいる場所。さっきもじもじ手をさすりながら教室から走り出していった女子たちの顔を見たら、みなわかる。
　沢口先生はさらに続けた。
「こんな陰険なことを考えている奴がいるとは思っても見なかった。先生は情けないぞ。ここにいるものの中で、今日一度もトイレに行かなかった奴はいるか？　いないだろう？　中には身体の調子が悪い人もいただろう。そういう人が、必死の思いで行ったのに、うその立て札を出されていたら、どんなにつらい思いするか、想像つかないほど、羽飛、お前は馬鹿なのか」
「どうせ途中で行っただろ」
　頬から手を離して、貴史はつぶやいた。美里ははれあがった頬の赤みをしっかと見つめた。
　痛みをこらえるように、片側の頬を引きつらせた。
「黙れ！　そこまで腐っているのか、お前は！」
　貴史の頭を出席簿でしたたか殴りつけた。貴史は反論しなかった。されるままで先生の説教を聴いていた。
「冗談でしたことかもしれないが、女子にとってはどんなに残酷なことなのか、考えてみろ！」
「冗談でリンチしてるくせに」
　美里ははっと息を飲み込んだ。
　何をしようとしたのか、一発でわかった。
　リンチと言ったら、そして留美子も絡んでいるとしたら。
　一年生用のトイレでの茶巾絞り事件、あれしかない。
「何がリンチだ。お前がしていることだそれは」

「違う」
　すっと貴史は倒した机を元に戻した。
　美里の方を見もしなかった。沢口先生なんかも視界には入っていないにちがいない。
　そばで美里はじっと見つめ続けた。何が起こるのかまったく見当もつかない。でも、自分のためにしてくれていることだけは感じ取れた。
　怒りを押さえきれず握りこぶしを震わせている沢口先生。
　貴史は片手を机に置いて、もたれながら言った。
「リンチがあったことを、聞こうともしないで、俺ばかり責めるのは違うんじゃないか」
「どうせろくでもないことだろう。このクラスに、お前以外で、誰がそんなことするっていうんだ」
「うちのクラスのある女子が、一年生の女子トイレでリンチされたってこと、知らないでよく言うもんだなあ」
「ある女子って誰だ……羽飛、清坂か」
　沢口先生の唇にふふと、かすかな笑いが浮かんだ。美里は見逃さなかった。瞬間、飛びかかって手元にあるコンパスの先をぐりぐりと突き刺してやりたかった。
　視線が集中している。美里に突き刺さっている。
　嘘じゃない。嘘じゃないけどどうして私にすぐに結び付けてしまうの。
　貴史が私のことをかばってくれている、今度は沢口先生、それで私をたたこうとしているわけ？
　あいかわらず、貴史は美里の方を見なかった。
「今の話は本当か？清坂。立て。お前が、羽飛に女子トイレの立て看板をするように頼んだのか。その「リンチ」とやらで」
「誰もこいつのこととは言ってないだろ」
　貴史が割り込むが、沢口先生は無視して美里を指差した。
「もちろん、羽飛が言うようなことが実際、あったとするならば、それは反省しなくてはならない。しかし、そうされるまでに、清坂、お前も自分に原因があると思ったりはしなかったのか」
「俺が言いたいのは、角田たちのことであって関係ねえよ」
「黙れ」
　角田留美子の方にうなづいて、立つよう促した。留美子も立ち上がると両手の指先を机の上でつけたりはなしたりして、手あそびをしていた。答えは、どうみてもイエスとしか見えない。言い訳をしなかった。
「今のことが本当ならば、先生は悲しい。理由を言いなさい」
　留美子は無言だった。
「清坂、お前はどうなんだ。そういうことが、あったのか」
　美里も立ち上がった。貴史と並んだ。
　どう答えればいいのか、わからなかった。ぎゅっと力いっぱい沢口先生の目をにらみつけ、そ

の勢いが抜けたまなざしで貴史をおずおずと見つめた。
　貴史も見返した。はっきり言ってしまえ、そう伝えようとしているのだろうか。でもそんなことをしたら、美里は誰にも気付かれずにすんだ、図工の時間の水たまりのことも話さなくてはならない。
　いざ追い詰められてみると、口が動かない。
　でも、貴史を裏切れない。
「なかったんだな、そういうことは」
　角田の表情は立ち上がると見えなかった。覚悟はしているのだろうか。それとも言い訳を考えているのだろうか。貴史はどうしたらいいと思っているのだろうか。唇と喉が熱くなり、あの時のように首の周りに暖かい空気が流れた。わからなくなった。耳ががんがん鳴り、周りのささやき声が分厚く聞こえた。
「清坂さんと角田さんが……」
「リンチっていったい……」
「美里の方がやり返すよ,絶対」
　美里は思わず手をまぶたにあてて冷やそうとした。とたん、指の冷たさで何かが溶けた。目の中の氷が何年分も溶けて涙の洪水になり流れていった。必死に顔を上げたまま、沢口先生の顔をにらみつづけるのがやっとだった。しゃくり声だけでも止めたかったのに、かえって大きくなる。必死に背を伸ばした。歯を食いしばったまま、流れる涙を拭かず、ただ凝視しつづけていた。
「もうよし、座れ」
　沢口先生は賢明にも特別授業を切り上げてくれた。これ以上、何も問われず、何事もなく、貴史と並んで席についた。
「清坂さんが泣くなんてさ」
「ぜってえ泣かない女だと思っていたのにな」
　帰りの掃除はしないことになったという。美里は座ったまま、机にうつぶしていた。どのくらいの時間がたったのか、みんなが帰ったのかもわからなかった。美里がその時考えていたのは、貴史がどうして自分を守ろうとしてくれているか、その理由だった。最後まで貴史は美里の名前を出さなかった。

その十　そんなこと、ないのに

その十　そんなこと、ないのに

　顔を上げると、詩子ちゃんだけがぽつりと自分の席に座っていた。私の斜め後ろの席だった。
「どうして美里、何も言ってくれなかったのよ」
　振り返ると、詩子ちゃんが畳み掛けた。涙にもまれてとっさに言葉を失った。
「……」
「ばか、図工の時間のこと、貴史より早く私、気付いていたのよ」
「まさか」
「ジャーしちゃったこと」
　詩子ちゃんはさらに続けた。
「いつもの美里だったら、あんなにがまんしてるなんてこと、なかったはずよ」
「しかたないのよ。突然したくなったんだから」
「角田さんにリンチされたことも知っているのよ,私」
「誰から聞いたの」
「代山さんから聞き出したの。美里は羽飛の前でトイレに行きたいって言えなかったんだって思ってた。それなりに、好きな男子、いるんだなって思ってた」
　絶句した。
「角田さんたち、美里を見ていて唖然としたみたい。美里、自分で始末できるかどうか、たんか切ったんだってね。私が一緒にいたら、絶対そんなことさせなかったよ。すぐ止めさせた。でも、私に何も言ってくれなかったのね」
　風向きがおかしい。話が読めなかった。ひとりでしゃべりたいことだけ、詩子ちゃんはしゃべっている。
「美里、どうして代山さんがおもらししたのか、わけ知ってる？　本人から聞き出したから確か。あの人、三組の木村のことが好きなんだってね。そばの席にいけたもんだからうれしくて、休み時間もずっと離れなかったんだって。でも、体育館寒くて、変な感じになってきて、一刻を争う状態になって。男子の前でトイレに立つ恥ずかしさ、想像できる？すごくあるよ。代山さんもそれを感じたんじゃないかな」
「そんなこと、わからない、そんなの」
「美里にはまだ、わからないよね。まだだから」
「まだ、私がなってないから、って言いたいの？詩子ちゃん」
　かっとなって言い返した。でも続けることができなかった。
　あの日から詩子ちゃんのそぶりが変わった。私に『あのこと』がはじまったことを話したあたりから。トイレに一緒に行くとき、少しだけ時間がかかるようになったこと。しょっちゅう後ろを気にするようになったこと。小さな声で「何か、ついてない？」と尋ねるようになったこと。
「でも、今日のことは、わからないって言っても許されることじゃないよ。美里、角田さんとの

ことは自分でかたをつけたんでしょ。いまさら羽飛のことを利用して、いじめかえそうなんて汚いよ」
「何て言ったのよ、詩子ちゃん！」
　のどがかすれた。でも叫んだ。自分が誤解されている。何か思い違いをしている。
　貴史を使っていじめ返す？
　何で私がそんなことしなくちゃいけないの？
　詩子ちゃんの声は激した。
「美里、羽飛をはじめとする男子がなにしたかわかってないよね。他の組の男子と手分けして女子トイレの前をうろついていて、角田さんたちのグループが来ると、すぐに『使用禁止』の札を下げるのよ。もちろん関係ない子はちゃんと通すけど。でも、男子の前で行く勇気なんてなかなかないよ。美里もわかるでしょ。ずっとがまんにがまんしてきた人が、みんなのいる前で『トイレに行っていいですか』って言うのがどんなに辛いか。美里がやりかえしたいって気持、しかえししたいって気持はわかるよ。それなら自分でやればよかったのよ。美里のことを好きな男子使ってやらすなんてこと、しちゃいけなかったのよ」
「そんなんでない！　詩子ちゃん！」
　貴史が勝手に、と言いかけて口をつぐんだ。
　貴史は私の悔しさを一手に引き受けてくれた。裏切れない。
　詩子ちゃんの言葉も痛い。そこまで卑劣な真似はしていない、そう言いたかった。
「私、絶対そんなことしてない！」
「羽飛が勝手にしたってこと？」
「……」
「もしそうだとしても、美里は羽飛にだけ、本当のこと話したんでしょ。私には何も言わないで」
「話してない、なんにも。本当に何も」
「誘惑したの」
　すきなく詩子ちゃんの尋問は続いた。見当違いの方に進んでいた。考えたこともない方向に。
「羽飛が美里のことを好きだということ、知っていたんでしょ。同情されるようなこと、言ったんでしょ。私だったら話だけ聞いて、何も役立たないから、ってばかにして」
「違うのよ、貴史に話したのはそんなことじゃない。誘惑、なんて、考えたこともない」
「なら、羽飛が嫌いなの？」
「そんなんじゃないって、ただ」
「好きなの嫌いなのどっち！」
　詩子ちゃんは感情を高ぶらせて涙をこぼしていた。
「どうして詩子ちゃん、ふたつにひとつの答えしか出せないの！」
　おとなになるって、ふたつにひとつの答えしか思いつかなくなることなのだろうか。私は貴史を好きとも嫌いともいえない。本心だ。
　でも、今の詩子ちゃんにそれはわかってもらえそうになかった。

　もっと詩子ちゃん、自由だったのに。
　あれが、あったからなの？
　血が一滴、流れただけじゃない。
　りりしい詩子ちゃんが切り離されていくよ。
　詩子ちゃんの激しい言葉から、私はなじんできたふんわりした時間が、ゆられてふるえているのを感じた。

「みさ……ん？」
　貴史が教室を覗き込む気配。
　まだ帰っていなかったのだろうか。詩子ちゃんが乱暴に目をこすってランドセルを担いだ。貴史の顔を一切見たくないという風に。詩子ちゃんを見つけた貴史は口を半開きにして、思わず頬を押さえていた。きっと保健室にいかなかったのだろう。まだ痛むのだろう。
「ちょいと待てよ。藤野。お前だろ、ちくったの」
　呼び止めた。
　まさか、詩子ちゃんが？
　詩子ちゃんは私の方をじっと見つめたまま、潔く答えた。
「そうよ。私よ。美里のことは話さなかったけど」
　立ち上がり、ひっぱたきたかった。私の味方だとずっと思っていた詩子ちゃんが裏切ったこと、頭で考えるよりも体が勝手に反応した。手が挙がる寸前だった。
　その前に貴史は自分のランドセルを床に投げつけた。
「お前なあ、きたねえぞ」
「汚いのはあんたよ」
「いつからお前、沢口のめんこになってしまったんだ」
「羽飛だけでしょ。沢口のせいで痛い思いしたのは。角田さんたちはね、あんたのせいで死ぬ思いをしたのよ」
「角田たちのしたことがまっとうにみえるのかよ」
　貴史の声は無我夢中で怒鳴り散らしているようだった。声は大きい。でも貴史の言葉は、私にしか通じなかった。詩子ちゃんには、上っ面の意味しか通らなかった。
「あんたは美里のためなら何したって平気なんだよね」
「別に、そうしたわけじゃねえよ」
　ぶっきらぼうに言い返す貴史。
「じゃあどうしたのよ。美里がリンチされたから、復讐したんでしょ。おしっこジャーで美里が泣きそうになっていた時、水をかけてごまかしたのは誰よ」
「こいつにそんなことするわけないだろ」
「羽飛は美里が好きなのよ。美里をいじめる奴はみんな死んでしまえばいいって思ってるのよ」
　貴史は私の方を見なかった。茶色い戸の柱に寄りかかり、詩子のランドセルをにらみつけ、切り札を出した。

「藤野を好きな奴ほどな」
　かたん、と詩子ちゃんのランドセルが鳴った。
　その音に誘われて、詩子ちゃんは誰を思い浮かべたのだろうか。
　私はふたりの名前を記憶からひっぱりだした。
　ひとりはサッカー部ミッドフィルダーの木村。藤野詩子命と、仲間内では、知らないものがない事実。
　もうひとりは、その場で頬をはらし、私を見ないふりして気にしてくれている、まぎれもなく貴史のこと。

　心がふるえた。
　詩子ちゃんはいつか、男子のことをがきっぽいと言い放った。あれは貴史に向かって言ったのだろうか。木村が詩子ちゃんに惚れぬいているという噂を耳にしても、『そんなの私に関係ないじゃない』と私に言い切った。
　別に木村のことを嫌いというわけではないのだろう。
　ただ、だれそれが好きという話から離れていたかったからだろう。
　恋心なんて、今までの詩子ちゃんには関係ないことだと、思っていた。
　だけど、詩子は私をかばいすぎて、傷を負った貴史を執拗に攻めている。
　その裏で、守られている私を罵っている。
　私が何も知らずに、平気で貴史の思いを利用している。
　詩子ちゃんはきっと、そう思い込んでいる。そう読んだ。
　どうしてそこまで思い込むのか。

　詩子ちゃん、貴史のことが、好きだったんだ。
　貴史って、そう思われてるんだ。

「とにかく、私、縁切るからね」
　詩子ちゃんは教室からしずしずと出て行った。椅子をきちんと納め、立ち上がったときよりもしとやかに振る舞い、貴史のいる反対側の戸を開けて。
　振り返らなかった。

その十一　いえないこと、わすれられないこと

　詩子ちゃんが帰った後、貴史は自分の席脇に立ち、机の中を探った。忘れ物をしたらしい。私も教科書とリコーダーをランドセルと手提げに分けてしまい、しょった。
「ぎゃんぎゃん泣いてよく恥ずかしくねえなあ」
　貴史は目を合わせずにつぶやいた。
　探し物は見つからなかったらしい。から手のまま、さっき投げ捨てたランドセルを拾いにもどった。その場で背負うと、立ったまま。
「美里、帰らねえのかよ」
　深呼吸して、うなずいた。私も貴史の後を追った。貴史の歩きは速い。私と並ぶまいとして意地になってどしどし歩く。追いつくのに必死だった。
　そろそろ用務員のおじさんが「帰れよ」と見回りに来る頃だ。校長室前の振り子時計が一度鳴った。部活の練習も終わる頃だろう。部活連中がもどってくるまでに校門を出たいと思っているようだった。
　靴置き場に生き、履き替える。靴の中に何か入っていたらしく、貴史はすのこ板の上に立ったままもそもそ動いていた。
「何書いてるの、それに」
「美里には関係ねえだろ」
　貴史は私にその紙を隠した。ちっと舌うちし、ジーパンのポケットに押し込み、
「先に帰ってろ」
　命令した。なんでよ、と聞きたかった。
「あんたに言われる筋合いないわよ。帰るけど貴史はどうするの？」
「行くとこある。美里が来ると絶対、邪魔だ」
　ふんとむくれて私は付いていくことにした。
「私がいるとなんかまずいんでしょ」
「だからさっさと帰ってろよ」
「あ、さっきの手紙、もしかしてラブレター？　私、見たいな」
「なわけないだろ」
「だったら、ついてく。言いふらしてやるから」
　貴史はむっとしてそれ以上何も言わなかった。
「どうなっても知らねえぞ」
　私がいったん決めたら絶対に意志を変えないことを、知っているからだろう。
　ただ、ラブレターをもらっただけだったら私も野暮なことをしないだろう。
　違うものの匂いが、なんとなくした。いつも貴史と私が巻き込まれるごたごたの予感。
　こいつひとりで行かせたら、だめだよ。

　それほど歩かなかった。
　人のいない叢に足を踏み入れ、コンクリートの敷いている道からそれていった。すすきの群れに隠れた、すでに廃止になったバス待合室の建物だった。さびて読めない停留所の名前。貴史が先に入って美里が戸を閉めた。窓があるが、人の通る気配はなかった。役立たず。きちんとノブをまわして締めた。手を離すと、タバコのやにが黒くついた。吸殻もたくさん飛び散っている。両側の木でできた黒いベンチはみしみしと、古さを誇る音を立てていた。
　貴史のそばに私は座った。貴史は向かい側にうつってランドセルを下ろした。
「どうしてこんなところにくるのよ」
「……」
「あんただけ呼び出されたの？　他に誰か来るの？」
「来る、けど中学生が来たら逃げる」
「なんで」
「姉ちゃんたちの学校で、ここタバコをすうとこにんってるんだと」
「たばこって二十歳になる前に吸ってもいいの」
「ばか、隠れて吸うんだぜ」
　やにに貴史の元気な声が吸い取られているみたいだった。声がやつれていった。
　足元に一冊週刊誌が落ちていた。私は拾おうとした。貴史がいきなりひったくった。そのまま戻ってめくり始めた。
「貴史ってばひとりじめすることないでしょうが」
　私ものぞこうとした。無言で貴史は隠した。ページを開かないように押さえ、黄色のトレーナーの下に押し込もうとした。
「ずるいよ、私にだって見せてくれたって」
「お前が見たって面白くなんてねえよ」
「あんたが見たらいいの」
　私は貴史の背中を押し、頭を押さえつけ、ジーンズの尻ポケットにしまいこんだであろう紙切れを探った。靴の中に入っていた「ラブレター」らしきものだ。子供の頃から取っ組み合いして遊んでいた私のこと、いつものことだ、
「ほーら、これね、返してほしけりゃ見せなって」
　戸惑い顔の貴史は、私の手にある紙を見たとたん、遊びの姿勢を捨てた。紙は四つ折りで細かにしわが寄っている。びんせんらしい。ふざけ気分でひらめかせ、走り回る私を血相変えて追いかけた。
「返せ馬鹿野郎、てめえ、見るな、美里！」
「ラブレターなわけないね」
　振り向いた拍子にトレーナーから本がつるりとすぺっておちた。貴史はそれをぶつけようとした。一瞬早く私は紙を開いた。
「ばかやろう！」

読むか読まないうちに私の手から貴史がひきちぎった。
私はまだ冗談気分のままだった。見たい、読みたい。貴史の手から奪い返そうとした。
いきなり貴史は肩を掴んで床に私を突き飛ばした。手加減、全くしてくれなかった。
左腕に全体重をかけて倒れた。
ほこりがベンチの下にぶらさがっていた。起き上がろうとしても腕がじんとしびれて力が入らない。
貴史が紙を細かく引き裂き、細かくし丸めるのが見えた。
頭をもたげ貴史の足元を見ると、男性週刊誌の際どいヌード写真が開いていた。顔が厚くほてってくるのがわかった。大股開き、何も着ずに横たわっている女性の写真だった。外国の人だった。髪が黒く、まゆげが太く、目が大きい。
ここで横たわっていると、写真の女性と同じことをしているようでいやだった。痛いのをがまんして身を起こした。腕がまだじんじんする。本を自由の利く手で端の方にすべらせた。貴史のいる前で読みたくなかった。
貴史が紙くずを丸めて床に落とした。からみあった玉がぱさんとすずしい音をたてて落ちた。
「美里なんか勝手に死んでろ！」
ランドセルを置いたまま貴史は戸を開けた。
「私も行くよ」
貴史は背を向けたまま動かなかった。一人で帰ろうとするわけがないだろう。もし帰ったら貴史の家までランドセルを持っていかなくてはならないから。
どうしてここに来なくてはいけなかったのか。私にも教えてくれないのかなあ。
「……帰れたら、とっくに帰ってるぜ」
あきらめたのか、貴史は戸をもう一度閉めた。美里と目を合わせなかった。ベンチの隅に座り、きっと外を見た。私も立った。外には夕暮れで光った枯草の茂みだけが揺れていた。
「なによ」
「美里なんかのためじゃねえよ」
「どうして私のことが出てくるのよ」
「おとしまえつけるだけだ」
「誰の？もしかして私の」
「違うと言ってるだろ、ばか」
「ばかばかってしつこく言わないでよ」
おとしまえ、か。
それならば、私は貴史の側から離れるわけにはいかない、そう思った。

ただ単に、男子同士のけんかだったらやぼなことはしない。ちゃんと身を引いてうちに帰るだろう。
でも、貴史の様子はやはり変だった。私が詩子ちゃんと言い合っている時、貴史はどこにいたのだろうか。まさか私が帰るのを待っていてくれたとか？　可能性はある。様子が変だと思っ

たら、特別に断ることもなく一緒にいようとするだけだった。私も同じ経験を何度かしている。
　いきなり帰るよう命令したのもおかしい。もちろん私は命令されたらやり返す人間だから、言うこと聞かなかったけれども。本当は私をここに連れてきたくなかったのだろう。「勝手にしろ」の一言だった。
　貴史は何かを隠している。私から離れたくない、そんなことを感じているはずだ。
　だったら、私も離れない。絶対に、見届けてやる。落とし前を。
　角田さんたちのリンチについて、貴史はあえて言い放ってくれたのだ。
あんなことしたら、何言われるかわからないのにだ。
　貴史の性格から考えて、自分でしでかしたことは自分でけりをつけるだろう。
　角田さんたちに呼び出されたかなんかしたんだ。
　私はほこりがついた髪の毛の先を払った。気まずい思いで貴史とは反対側に座った。貴史は下を向いている。私の足元にあるポルノ雑誌をじっと見つめていた。私も意識した。貴史の視線が、急に怖いと思った。

　角田さんはいなかった。代山さんもいなかった。夕暮れ色を背中にしょって戸を開けたのは、私のスカートをめくり上げた連中五人だった。
　見覚えのある男子が二人続いた。同じ学年ではない。左胸につけた名札を見て六年生だとわかった。背丈は同じぐらいだが、目がやたらと細かった。にやにやして私と貴史を眺めていた。
　合点がいった。
　こいつらだ。
　また、リンチをかけるつもりなんだ。

　頭ではくっきり、何をされるかがわかっている。
　わきあがるものは、いつまでたっても慣れない。でも今は貴史が側にいる。ずりずり私は貴史の方に寄ろうとし、途中で止めた。おもちゃにされる。平気のへいざを装った。
　私と貴史のいる場所が離れているのに気付いて、妙だと思ったらしい。
「あれ、やっぱり一緒なんだ。どうしてそんなに離れてるのさ」
「まだくっついてないの、いっつもいっつもべたべたしてるくせにさ」
　自分の声だけ驚くほど冷めていた。
「まだ私に用があるの」
　貴史は足を床につけてよそ見をしていた。
「やっぱり、大好きな清坂さんだもんね。いつでもいっつも離れないんだよね。いやらしい。ちょっと、あんたもこっち向いてよ」
　六年の男子二人が、貴史の方を指差して笑った。不良っぽくはない。強そうには見えなかった。
　なぜ貴史は抵抗しないのだろう。こんな奴、殴ってしまえばいいのに。
　動かずふてくされたように貴史は横を向いていた。

　いきなり私は五人に両腕を押さえつけられた。椅子から引きずりおろされた。勝ち目がない。一人だったら絶対になんとかするのに、離せなかった。
「また集団で何かする気なのね！」
　何も言わず、美里を床に押さえつけた。足をばたつかせ、力いっぱい暴れるけれど、どうしても勝てなかった。
「ふざけるんじゃないわよ。私が何したっていうのよ！」
「私たちに恥かかせたじゃないのよ。馬鹿女」
　貴史は、と目で追った。同じような状態で両腕を押さえつけられていた。抵抗していなかった。物言わず床に正座させられていた。私の暴れ叫ぶ声だけ、うるさかった。
「貴史、あんたどうして逃げないのよ！」
「逃げられるわけないよな。なあ、羽飛」
「あんたらに言われるすじあいはねえよ」
　ぐっとにらみつけているものの、やはり貴史は抵抗しなかった。
「今やってることを、どうせ俺は先公たちにちくるから、覚悟しろよ。今度は、角田たちだけじゃすまないわな。いいかげん手を離せよ」
「ちくれるもんならちくってみな。今からあんた達の、もっと恥ずかしいところ、言いふらしてやるんだから。ね、先輩」
　私も四人の女子に引きずられ、貴史とお見合いする形で座らされた。ちらっと目が合ったが、お互いにそらした。ぐっと前に近づけられ、正座させられた。ひざとひざがくっついた。貴史のひざのとんがりぐあいがスカートを通してつたわってきた。逃れたくて美里はさらに足をばたつかせた。足を宙に浮くぐらい跳ね上げた。蹴飛ばし返された。腕に噛み付こうとした。ランドセルで顔を押さえ込まれた。万事窮すだ。
「あのさあ、これからふたりでおもしろいこと、してくれない？」
「いっつもしてることだよね」
「清坂さんと羽飛って、仲いいもんね」
　何をされるのかわからず、全身が震えた。叫べるだけ叫んだ。
「影で呼び出してこういうことするしかできないのよね。情けない奴。あんたたちと一緒にされたくない！」
　貴史も私から離れようと腕を抜こうとする。弱すぎた。
「さ、やろうよ。まずはキスしてみてよ」
「カメラ持ってきたもんね」
　頭をぐいと押し付けられた。やめなさいよとしかいえない。顔をそむけ、真正面にある貴史の顔から逃げようとした。貴史も同じだった。歯を食いしばり、うめきながら離れよう離れようと首を振りつづけた。とうとうひざとひざがはさまるくらい押し付けられ、私も貴史もこれ以上離れることができなくなった。
「やめてよ……」
　私の唇が貴史の首筋を走った。互いの額をくっつけられて鼻と鼻がぶつかった。貴史から汗の

沈んだ匂いがする。近い。私はもう避けられなかった。べとべとしたやわらかいところに唇が触れた。目と目がぶつかり、ぐるぐる回った。さらさらすれるのはほおとほお。鼻から出る息がぶつかりあった。

　だいだい色の人影。戸がきしんだ。
　はっと見上げると、誰かが窓から顔を出していた。光に反射して顔かたちはさだかでない。ふたりいるように見えた。
「誰か、いる、のぞいてるよ！」
　貴史に噛み付きそうになりながら叫んだ。
「やだ、うそでしょ！」
「絶対見られないって言ったのだれよ！」
　驚いたのか、私を押さえる八本の腕が緩んだ。これを逃しはしない。肘鉄でおなかの真中をそれぞれついた。自分のできる技で、かなり強烈なもの。ついでに貴史を押さえる相手のすねを思いっきり蹴り上げ、腕に歯型をつけた。
「この女、噛み付きやがった！」
　叫んだ拍子にこちらの手も離れた。貴史はすばしっこく相手の急所を狙い、うずくまらせた。
「美里、逃げるぞ」
　貴史はランドセルのつりひもをひっつかみ、もう片方で私の手を握った。引きずられるようにして、私も飛び出した。まだ橙色の光は消えていない。戸がきしみ、ぱたんと跳ね返った。道は枯草だけ、ハイソックスにちくちく突き刺さる。みんな蹴飛ばして走った。追ってくるのかわからない。ただただ二人で走った。すすきの生い茂る原っぱを駆け抜けた。

その十二　もういちど、こたえをおしえて

　ふたりが息を吐いたのは、しゃがむとすっぽり隠れる薄野の群れだった。私は苦しくて、両手をついてしゃがみこんだ。ぜいぜい喉が鳴っていた。貴史もごろんと横になった。
　夕暮れ色が消えないうちに帰ったほうがいい。原っぱの向こうからは、コンクリートの道が見えた。その道をまっすぐ歩いてゆけば、迷わず家に着く。真っ暗になってしまったら、電灯の明りしか頼るものがなくなり、ややこしい道に入り込んでしまうかもしれなかった。この辺ではないけれど一度、私たちくらいの小学生を狙った『神隠し』事件が起こり街全体が騒然となったことがあった。
　私は息を整えて貴史の顔を見た。寝ているかと思った。目がぱっちりと開いていた。横を向いて顔をそらしていた。
「貴史、起きなよ」
「……」
「寝ちゃだめだよ」
「……ここじゃねしょんべんしても平気だろ」
　風は冷たかった。息が上がっているせいか、身体はぽかぽかしていた。私も寒くなかった。貴史の手は黒く、冷たかった。頬も片方だけ赤かった。私は片手を貴史の頬につけてみた。痛んでいる側だった。いてえとうめいて貴史は起き上がった。
「病人にひでえことすんなよ」
「そうしないと起きそうにないんだもん」
「……ほれ、痛いだろ」
　さっき貴史が突き飛ばした腕の部分をぎゅっとつかまれた。ぱっかり腕が割れるかと思った。痛すぎる。
「痛い痛い痛い！　貴史の人殺し！」
「でも、泣かねえだろ」
「泣くもんか」
　私は黙った。
　貴史も私をじっと見つめながら手をゆるめた。またお下げの先をつまんだ。ひっぱりはしなかった。
「なんで泣いちまったんだよ。美里」
「……なんていえばいいかわかんなかったんだもん」
　素直になれた。言うこと言えた。
「全部言えばよかっただろ。角田に何されたかとか、言いたいこと、たくさんあっただろ」
「そんなこと言ったら、原因が何かまで、全部話さなくちゃいけないよ。私だって、言いたくないこと、あるんだから」

「図工の時間にやっちまったことか。気にしてたのかよ」
「それに……」
　貴史がいち早くバケツの水をかけてごまかしてくれたこと。そこまで口にできなかった。
　好きと、と言わない限り、仲良くできなくなる時がだんだん私と貴史に迫ってきているのかもしれなかった。
　その時、私は貴史に、『好き』という言葉を言えるだろうか。
　想像もつかなかった。あの時、かすかにふれた唇。初めてのくちづけ、そうだったのかもしれなかった。漫画に出てくるような味も匂いも感じられなかった。厚みをもった互いの唇に触れた時、何かが私の中で止まり、うごめいた。唇を通して貴史も動けなくなっているのを感じた。
　凍りついた、というのだろうか。
　何を意味しているのか私にはわからなかった。
　残ったのは、汗の乾いた匂いだけだった。

　言葉を濁して私は貴史を見返した。貴史は口を軽く、手の甲でぬぐっていた。視線に気付いたのか、慌ててすすきの穂で手をこすった。
「あ、やっちまった」
「手を切ったの？」
「まあいいや」
　照れ隠しだろうか、貴史は明るい調子で尋ねてきた。
「美里、あのまま誰もこなかったら、どうなってたと思う」
「キスだけで終わらなかったら？」
「だから一緒に来るなって、言っただろ」
「でも、私が誰か来たのを発見したから、あの場所から逃げ出せたんでしょ。感謝しなさいよ」
「ばか、あいつら、本見てただろ。妙な格好させられたりしたどうするんだ。全く、美里の発想って理解できねえよ。普通の女子だったら、すぐ言われたとおり逃げるくせにさ」
「どういうことよ。裸になってポーズとらされたりしたかもってこと？」
「あとは自分で想像しろ！」
　目が引きつり私はつぶやいた。
「冗談じゃないわよ。あいつら、変態じゃない！　でも貴史、どうしてそんなことまで想像できたの？まさか狙って……」
「殴るぞ。ばか」
「まさかよね。冗談冗談」
　答えず、貴史はあたりを見渡した。
「美里、ちょっと黙れ。誰か来た」
「あの連中？」
「違う。どっちにしろ、二人でいるのを見られるのは、ちょっとばかしまずい」
　貴史の言うとおり、私は薄の陰に身を潜めた。

　かさかさかさと、薄のすれる音。
　一本だけ手折って、私は貴史の側にぴったりくっついていた。
　何度か貴史が、見えないように様子をうかがい、つぶやいているのを聞いていた。
「あ、貴史、今何ていった」
「うるせえ、黙ってろって、言っただろ」
「誰がいるのかだけでも教えて」
「小さい声でもわかるだろ」
　ひょいっとしゃがみこむと、貴史はささやき声で答えた。
「窓のばけもの、いただろ。あいつら、木村と藤野だ」
「木村と、詩子ちゃん？　なんで、なんで」
　教室で一戦交えた後、なにかがあったのか。想像がつかなかった。
「ちょっとな、タイミングが悪かったよなあ。美里が絡むとろくでもないことになっちまう」
　ぼそっとつぶやき、
「実はな、今日、あの場所で、木村の奴、藤野を呼び出したんだ」
「どういうこと？」
「そりゃ、言いたいこと、あったんだろ。誰もいないいい場所ないか、って聞かれたから、あの停留所を教えてやったんだけど」
「……もしかして、詩子ちゃんに、とうとう告白しようとしたとか」
「当たり。しかしまあ、よりにもよってってとこだな」
　意味がわからず私は戸惑った。
「ちょっと頭の中を整理させて。つまり、木村は詩子ちゃんを、あそこに呼び出して告白しようとしたってわけね」
「その通り」
「でも、私たちがとんでもないことになっていたと。木村はそのこと、知らなかったんでしょ」
「もちろん。知るかよ」
「じゃあ質問。どうして貴史、あの場所に行ったの？二人の邪魔するため？」
　貴史は困りきった表情で薄をもう一本、折った。
　遠くでふたりぶんの、気配がする。

「六年の奴らから、いろいろなことの落とし前をつけろといわれたから、俺も仕方ないってことで場所を指定したんだ。学校で騒ぐわけいかないだろ」
「おとしまえって、まさか、私のために」
「ばか、そんなわけねえだろ。俺も六年との間ではいろいろあるんだ」
　確かに上級生との間でけんかしたことがあるというのは聞いていたけれど。
「それって、角田さんとか、代山さんたちに言われたから？」
「違う。あれ以来、代山は最初から外だ。計画したのは、角田たち女子五人だ」

「いったい、なぜ」
　そこが引っかかり、私は首をかしげた。声を潜めたまま貴史も答えた。
「あの女子たちと六年の男子どもとは、どういうわけかわからんけど、つながりがあったんだろうな。俺も知らなかった。てっきり男同士の一戦かと思ってたから」
　それは違う、と私は首を振った。
「私に帰れって言ったのは、そういう理由だったのね」
「関係ねえよ」

　だんだん状況が飲み込めてきた。
　貴史が私をかばったことに、すべての発端があるのだということ。
　あの時、私に水をかけてごまかしてくれた貴史を、一部の女子五人は何かの色眼鏡で見つめたのだろう。
　「清坂さんがおもらししてたの見たでしょう」などと声をかけたというのは、その辺にも理由があるのかもしれない。
　なぜ代山さんは関わらなかったのだろうか。
　裏で糸を引いていてもおかしくないのに。
　もし、私が図工の時間、ぎりぎりでトイレに駆け込んとしたら、絶対に代山さんのせっまつまった気持なんて感じられなかっただろう。
　貴史たちがトイレの清掃札をかけ違えて困らせた時、角田さんもきっと代山さんの気持をちょこっと味わったのかもしれない。代山さんと私とが違っていたのは、側に貴史のような存在がいたかどうか、それだけだった。男子と気兼ねなく馬鹿話できることが、うらやましかったのだろう。
　私が貴史の前で大失敗したところを見られても、すぐにかばってもらえたこと。
　詩子ちゃんが話していたように代山さんは木村に片思いしていたらしい。
　片思いしていた男子の前でトイレに立てなかった。
　しかも、大好きな相手からは「しょんべんたれ！」とからかわれる羽目になる。もちろん木村の方も文句はいっぱいあるのだろう。けど、どんなに恥ずかしいことだったか、私にも想像はつく。
　一番辛いのは、代山さんだと沢口先生は言った。
　私は、自分で始末できないくせにとあきれて見ていた。
　でも、自分が同じことになってみて、初めて、代山さんの痛みが伝わってきた。貴史の前で、やらかしてしまいたくない、そればっかり考えていた五時間目の長い時を、私は忘れられない。
　代山さんに向かって、
「どうして五年生のくせにトイレにいけないの！」
と責め立てる私に、もうなれない。
　自分だけが正しい、こともあるけど、正しくないことも、確かにあった。

　貴史は私の考えていることを無視したまま、
「でもな、美里。俺が思うに、代山は角田たちに利用されているだけだと思うぞ」
「おしっこもらしちゃったことを？」
「前から美里が気に食わないと思っていた、ちょうどいいタイミングで、代山のちびりが起こったわけだよな。『人間失格』になりそうになった美里をここでたたかないわけいかないって」
「ああ、言ってたよ。前から私の『正しいことを正しいっていう態度』が気に入らないって」
「代山も、角田たちに同じようなこと思っていたんじゃないか。自分のためにしてやってます、って顔して、実は自分の気に入らない女子をけりいれようとしているだけだって。だから、代山は藤野にあのことを話したんじゃないか」
「え？」
「つまり、藤野しか、本当のことを話せなかったんじゃないか。代山は。藤野はなんだかんだ言って美里べったりだしさ。美里が本当はどういう気持で木村たちに言い返したのか、それを藤野は教えてやろうとしたんだろうし、だから代山も本心を、藤野にしゃべったんだろうし」
　あの時言った。詩子ちゃんは「代山さんから聞いた」と。
「ということは、詩子ちゃん、私が木村に文句言った時の本心を、代山さんに伝えてくれたってこと？」
「直接話をしたってことだから、それしか考えられないだろ」
「そんなあ、私知らなかったよ」
「だから、美里」

　貴史は両方お下げの端をひっぱった。そのままの髪の毛は風にかき混ぜられからまっていた。顔と顔をまじかに、肌の匂いを感じない距離で。
　じっと瞳を重ねた。
「美里が全部しゃべってしまったほうが、けりついていいんじゃないか。そりゃ、まあ、教室でちびってしまったとかで恥ずかしいっていうのは、俺もわかる。でも、お前のことだもん。言い返せるだろ。かなわねえよ。不死身の女だし」
「でも、勝ち目ないよ。あの沢口先生だよ。角田さんの味方じゃない」
「人間失格、にもこだわってるのかよ」
「そう。私、何もできない、トイレに行きたいって言うこともできない、立つこともできない、馬鹿女って言われるのが関の山よ。そんなことになったら、私」
　切り出せなかった。一番怖い。貴史にも、言えない。
「沢口の顔におびえてる奴まで味方にしたいのかよ。みんながみんなお前の味方になるとは思わないけどな。でも、まあ、みんながみんな敵になることだけはないだろ」
「……貴史、あのね」
　私は最後の不安を切り出した。
「そのこと話したら、絶対言われるよ。清坂さんって、赤ちゃんですねって。あんなとき、立てるわけないのに。誰だって、がまんできなくなったら仕方ないのに。わかんないくせに」

　おさげをまたひっぱり、今度は交互に遊ぶ貴史。
「本当はそれだけじゃないだろ」
「どうして？」
「俺だったら、誰が残ってくれるか、それだけを心配するだろうな」
　あっと、言葉に詰まった。私は何も言えずにうつむいた。寒くなった。
　貴史の視線が痛かった。見つめられて私も唇をかんだ。
　寒いけど、言うともっと寒くなりそうでいやだった。
「さっき、お前が盗もうとした手紙、誰からきたのか当ててみな」
　手がお下げから離れた。さっきと同じだった。膝と膝を突き合わせ、いつのまにか正座していた。無理やりじゃない。そうしたくなっただけ。
　少し考え、指を折った。
「……詩子ちゃん。そうでしょ」
　詩子ちゃんはずっと貴史のことを思っていた。見抜いたつもりでいた。
　詩子ちゃんが書いたラブレターかもしれなかった。
　男子をガキっぽいと言った詩子ちゃん。
　初めて好きになった男子が貴史だったなんて信じられなかった。
　波だった心を隠せなかった。
「木村、かわいそうだね。ずっと詩子ちゃん好きだったのに、別の奴が好きだって言われちゃうんだろうなあ。貴史、あんた詩子ちゃんにどう答えるの」
「お前、勘違いしてるだろ。だから美里に説明するの嫌だったんだ」
「だって、それ、貴史あてだよね」
「俺あてならみんなラブレターなのかよ」
　はああ、と貴史はため息をついた。
「まあ、木村は言うだけのことは言ってるだろ。大丈夫かって聞きたくなるくらい藤野のこと考えてるみたいでさ。大抵だったら俺もからかうけど、あそこまで真剣だったら、協力したくもなるぞ」
「告白するようけしかけたのは貴史だったのね。でもどうするの。ミイラがミイラ取りになっちゃったら」
「だから、何度も言っているだろ。藤野は俺なんかに気なんてねえよ。藤野が一番気にしてるのは」
　じゃあ、なんだったんだろう？貴史になんであんなにくってかかったんだろう？わけがわからなかった。
　一生懸命考えた。
　貴史になぜ、靴箱に手紙を置く必要があったのか。
　貴史はなぜ、私に見せたくないと必死に奪い返そうとしたのか。
「破り捨てるような内容だったのね」
　あのかさかさ丸まった紙くずの転がる姿が思い浮かんだ。あんなに貴史が怒ったから、一行も

読まないでしまった。
　詩子ちゃんが貴史に宛てたラブレターでないとするならば、ああ、なんだろう？
「一度しか、俺、言わねえからな」
　貴史はそっと、耳にかかるお下げ髪を持ち上げて、ささやいた。

「美里をひとりじめするのは、おねがいだからやめて」

　暗く乾いた空気が、遠くの景色を幻にした。
　ぽつりぽつりと明りが灯り始めた。私は虫に刺された手足をかきむしりながら、薄野を出た。
　すでに詩子ちゃんと木村の姿はなかった。せっかくだったら告白のゆくえがどうなったかも知りたかったのだけど。明日、ゆっくり聞き出してみよう。
「けど、なに勘違いしてるんだろうな。俺と美里、そんなにくっついているように見えるのかなあ」
「ぜんぜん思わないけど」
「だよな」
　あす、私はことのおこりをすべてを話そうと決めた。。
　角田さんたちにされたことはもちろんだけれど、なぜ私が代山さんに向かってそういうことを言ったのか、その理由もきちんと、人の前で話そうと思った。
　決して、代山さんを馬鹿にすることなく、ただ、私の本心でもって。
「でもね、貴史、あのことは言わないよ」
　暗闇の中でよかった。顔が勝手に火照ってきた。
「あのことってなんだよ。俺、全部忘れた。カメラで証拠取られたわけでもないだろ」
　貴史の表情も見えなかった。私は一本の横髪のお下げを自分でつまみ、振ってみた。

「あ、あいつら、まだいるぞ。木村たちだ」
　私の頭を力いっぱい押さえて貴史は再び叢にしゃがみこんだ。私も平べったく伏せた。
　かなり動き激しく走っている。さすが木村、サッカー部のフォーワードだ。
「こんな時間までいるってことは、うまくいったんだろうなあ」
「いや、もしかしたら俺たちを探しているとか」
「やだよ、見つかったら何言われるかわかんないじゃない」
「じゃあ、だまって隠れてろ」

　詩子ちゃんと木村ははあはあと息をつぎながら、私たちのいる場所の一メートル先に立ち止まった。
「さっき、清坂の声が聞こえたって言ってたよな」
「そう、今もこの辺でなんとなく。空耳かしら」
「俺もさっき、羽飛らしき姿を見たような」

「あの二人、やっぱりいつも一緒なのね。頭に来るな。羽飛のことしか信じてないって感じでしょ。美里って。だから私もたまに頭に来るんだよね」
「あのさあ、藤野」
「え？」
「結局、あの、藤野は、清坂以外、関心ないのか」
「まさか、そんなことないけど」
「俺は同じくらい、藤野のことが関心あるけど」
「え、よくわかんない」
「羽飛と清坂みたいな、ああいう感じに、俺もなれないかなって」

　しばらく呆然とした。
　貴史をつつき、声をださずにお互い指を立て合った。
「あいつら、こんなところで言うなよな」
「なあにが、羽飛と私みたいに、よ！」
「どうする、どうやって抜け出す？」
「気付かれないようになんて絶対、無理よ」
「かくなる上は、開き直るしかない！」
　瞬時に貴史の考えが読めた。
「オッケー、わかった、つきあうよ」
　目で合図をして、「せーの一で！」と掛け声をかけた。
　ぎょっと振り向く二人。
「ごめん、全部聞かせていただきました！」
　立ち上がり、ふたり同時に頭を下げた。
「盗み聞きするつもりじゃなかったんだけどね」
「お前ら、もっと早く結論だせよ。時間たっぷりあっただろ」
「では、お先に失礼します！」
　口をあんぐりあけて、何かを言おうとしている木村。私は両手を合わせて、「ごめん」と一礼したのち、背を向けて走ろうとした。いきなり後ろに抱きつかれた。
「美里、美里ってば、どうしていっつも羽飛ばかりにくっついてるのよ！どうして私に何も言ってくれないのよ！　私、停留所でひどいことされてる美里見て、泣いちゃいそうだったんだから」
「詩子ちゃん……」
「木村と一緒に美里たちがどこにいるか、必死になって探してたのに、どうして隠れてたのよ。しかも、ずっと羽飛と！」
「ごめん、詩子ちゃん。私は詩子ちゃん信じるからね」
　詩子ちゃんの目からは溢れんばかりに涙が膨れ上がっていった。大泣きするのも時間の問題だった。なだめてもむだみたい。

「本当よ、もう、羽飛にだけなんてこと、絶対言わないでね！」
　涙ぼろぼろと崩れる詩子ちゃんを支えた。私は貴史と木村の顔を交互に眺め、答えを求める視線を送った。どうしようどうしよう。
「俺たちを探す暇あったら、木村。どうして言っちまわなかったんだよ」
「だから、清坂。さっきまでずっと、清坂以外の話題でてこなかったんだよ」
　木村は明らかにがっくりきた表情で一言、そえた。
「ということで、最初から、仕切りなおしだ。清坂、お前がもう少し隠れてれば……！」
「私のせいじゃないわよ！　何が、貴史と私みたいによ！　もう、好きなら好きってはっきり言いなさいよ。情けない」
　詩子ちゃんは聞こえているのか、いないのかわからないまま。美里の肩にもたれかけ、泣きつづけていた。
「わかった。木村。今度は美里のいないところで、再アタックだ」
　貴史はにやにやしながら木村の顔を眺め、ぽんぽんと肩をたたいた。

　あすもなんとかなるだろう。
　お互い泣きじゃくった後には涙の貯蔵庫に水がたまるのと同じように。
　頬の涙の後を指でこすった。貴史に手を振った。腫れた頬をさすって貴史も笑っていた。
　たがいを思い会った傷跡はまだ、私と貴史のほおに残っていた。

　ふたりの時間は、まだおわらない。

　――終――

少女の時　ふるえる時間

http://p.booklog.jp/book/66792

著者：舞夜じょんぬ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/66792

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/66792

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ